

鵠沼

久 久 比 奴 末

はまゆうと桜 と

海光るわが故

第 1 1 6 号

浮世絵に見る「江の島・三重塔」……………	岡田 哲明 ……1
葛巻義敏氏を追って……………	神谷 祐太…14
鵠沼と鎌倉との微妙な関わり合い意外誌(史)……………	内田進之助…28
《今井達夫 落穂ひろい》①	
鵠沼のつれづれ……………	今井 達夫…35
Coffee Break……………	38
わたしの鵠沼の思い出 <4>	
鵠沼で出会った動物たち(哺乳類・鳥類)……………	内藤 喜嗣…40
《作家春秋》①	
宇野千代・今東光 『葱』	
今井達夫のこと「小説を書くことは飽きません」……………	森岡 澄…58
『鵠沼を巡る千一話』より	
須賀(すか)と高砂(たかすな)……………	渡部 瞭…60
活動の記録(平成29年12月～30年5月)……………	63
編集後記……………	66

『新編相模国風土記稿』(天保12年、1841)に、「鵠沼村久久比奴末牟良」

とあり、当時は“くぐいぬま”と呼んでいたことが分かる。

鵠 沼 を 語 る 会 発行

浮世絵に見る「江の島・三重塔」

建立寄進者は 杉山和一 関東惣検校

岡田 哲明(会員)

はじめに

会誌『鵠沼』112・113号で筆者は災害ボランティアの先駆け颯田本真尼の業績について述べたが、その時代背景を知るため明治初期の宗教界の在り方について調べていて、毎年初詣に行く江の島に三重塔があったことを知って驚いた。

明治元年に発令された太政官布告神仏分離令が廃仏毀釈の風潮を生み、それによって優れた寺院建築や芸術的価値の高い仏教美術品までもが多数失われた事は周知のとおりであるが、江の島の三重塔もその犠牲の一つなのであった。

江の島三重塔は元禄6(1693)年に建立、明治6(1873)年に撤去、つまり180年もの長い間、江の島を訪れる人々の目に触れていたのである。失われてから今年で145年になる。

藤沢浮世絵館

藤沢市辻堂神台 2-2-2「ココテラス湘南」7階に藤沢市立『藤沢浮世絵館』が2016年7月16日(土)にオープンした。この浮世絵館は、市政40周年にあたる1980年、葉山市長時代に日本大学元総長 呉文炳(くれふみあき)氏の浮世絵コレクションを購入したものをベースに、その後、市が独自に蒐集したもので、購入総額2億円、1500点余を収蔵所有する。随時テーマを決めて企画展を開催、入場は無料である。ただし、企画展の間は閉館になるから注意されたい。

昨年(2017)1月、筆者はこの美術館を初めて訪れた。パンフレットの挨拶文の下部には有名な葛飾北斎の「富嶽三十六景・相州江の島」の一部がイラストされていたが、そこに三重塔が描かれているのを発見した。それで他にも三重塔が描かれたものはないかと会場をめぐる二三の作品にも描かれていることが判った。係員に、展示物以外に調べる方法はないか訊いたところ、藤沢市電子博物館「みゆネットふじさわ」で浮世絵館所蔵作品が検索できることを教えられ、さっそく調べたところいわゆる浮世絵木版版画のほか、エッチング(腐食銅版画)や、肉筆画など十数点ばかり該当するものを見つける事が出来た。それらの作品

には三層の屋根がきっちり描かれたもの、二層まで描かれたもの、最上層のみ描かれたもの、相輪のみのものなど、島を見る位置によって塔の見え方は色々だが、いずれも三重塔の存在を明確に現している。もっと調べれば、江の島三重塔が描かれた作品は他にもあるに違いないと思う。

一方、江の島を題材とした浮世絵は非常に沢山あるが三重塔が描かれていないものの方が圧倒的に多いのはなぜであろう。たとえば有名な初代安藤広重の作には一つも描かれていない。これらの制作時期はほぼ 1800 年ころからの約 70 年間である。三重塔が建ってから 100 年間は全く絵がないのは謎であるが、それは浮世絵の沿革を知れば納得できる。

浮世絵の歴史

浮世絵の祖は戦国時代の武将、荒木村重の息子（一説には孫）とされる岩佐又兵衛(1578～1650)とも菱川師宣（1618 又は 1631～1694）ともいわれるが、又兵衛や師宣の時代の浮世絵は肉筆が主である。以前本誌でも取り上げた第一書房社主長谷川巳之吉が外国流失を防いだ又兵衛の「山中常盤」や師宣の「見返り美人図」もそうであった。浮世絵が木版刷りになり、複数印刷出来るようになったのは 1600 年代末頃からで当初は単色で墨か藍又は紅色で摺り、なかにはそれに手彩色したものもあった。やがて原画絵師、彫師、摺師、販売する出版元と分業化し多色刷り木版になったのは 1800 年頃であって錦絵ともいわれた。

浮世絵とは風俗画のことであり、そのモチーフには写楽に代表される役者・力士や春信一門の美人・春画などの人物や、伝説など物語を描いたもの、北斎などが描いた魚介・昆虫・動植物など様々なジャンルがあるが文化文政(1804～1829)時代に入ると伊勢参りや大山詣など、庶民の旅行ブームに伴い「名所絵」と呼ばれるジャンルが生まれる。富士山や江戸名所、東海道五十三次に代表される街道宿場風景などが北斎や広重その弟子たちによって繰り返し描かれるようになり、江の島が描かれるようになったのも、まさにこの時代からである。その傾向は幕末から明治前半まで続いたが、写真が一般化し、木版画も絵画芸術表現の一手法として扱われるようになり、いわゆる浮世絵版画の時代は終焉を迎えたのである。

「三重塔が描かれた浮世絵」をみゆネットからダウンロードしたものと浮世絵館から直接入手した映像を合わせて次ページ以下に掲載するが、作者（生没年）、題名、制作年代の一覧を掲げておく。

葛飾北斎（1760~1849）

「富嶽三十六景・相州江の島」天保 2~5（1831~1834）年
澤 雪嶠（生没年不詳）

「源頼朝公鎌倉鶴ヶ岡ニテ鶴ヲ放ツ図」文化（1804~1817）年間
歌川貞虎（生没年不詳）

「鎌倉七里ヶ浜ヨリ江ノ寫遠望之図」（大判縦 3 枚続）天保 10 年頃
菊川英山（1787~1867）

「無題（江の島道中）」文政（1818~1829）年間
歌川（橋本）貞秀（1807~1879）

「東海道名所之図内・江の島」江戸末期
柳々居辰斎（生没年不詳）

「相州七里浜」（蘭字枠、相輪のみ）1820 年頃
二代歌川豊国（豊重：生没年不詳）

「名所八景；江之島晴嵐」 文政~天保頃
二代広重（重宣：1826~1869）三代豊国（国貞：1786~1865）合作

「相州江之島」 江戸末期
溪斎英泉（1791~1848）

「絵俳書：名所発句集」田喜庵編 江戸後期
魚屋北溪（1780~1850）

「無題（江の島風景）」天保（1830~1844）初期
岡田春燈斎（生没年不詳）

「相州鎌倉惣図並富嶽遠景」（腐食銅版画）嘉永~文久（1848~63）
岡田春燈斎（生没年不詳）

「相州江之島風景」（腐食銅版画）嘉永~文久（1848~63）
司馬江漢（鈴木春重：1747~1818）

「無題（江の島風景）」（肉筆紙本水墨画） 寛政(1789~1800)年間
柴田是真（1807~1891）

「無題（江の島）」（肉筆紙本日本画） 弘化（1844）年以後
作者不詳

「江の島」（泥絵：覗きからくり原画） 江戸末期



富嶽三十六景・相州江の島 葛飾 北斎



源頼朝公鎌倉鶴ヶ岡ニテ鶴ヲ放ツ図 澤 雪嶺



鎌倉七里ヶ浜ヨリ江ノ瀉遠望之図 歌川 貞虎



東海道名所図・江の島 歌川 貞秀



無題・江の島道中 菊川英山



相州七里浜 柳々居辰斎



名所八景・江ノ嶋晴嵐 二代歌川豊国



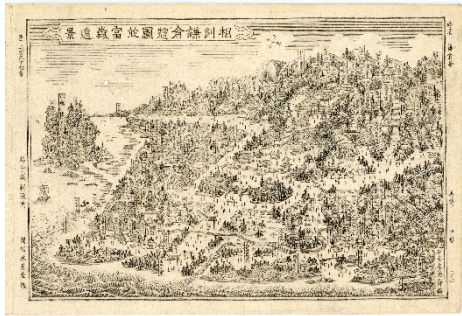
相州江之島（三枚続き） 二代歌川広重・三代歌川豊国（合作）



絵俳書・名所発句集 溪斎英泉



無題・江の島風景 魚屋北溪



相州鎌倉惣図並富嶽遠景（左）



相州江之島風景（右） 岡田春燈斎（銅版画）



無題・江の島風景 司馬江漢（肉筆・水墨画）



無題・江の島 柴田是真（肉筆・着色日本画）

三重塔は、いつ、誰が建て寄進したか

三重塔が記載された絵図面（地図）は幾種類もある。それらは浮世絵に描かれるずっと前からものが存在する。一例を挙げれば『金亀山江島図』（宝永・正徳頃 1704～1715・藤沢市文書館蔵）には下ノ宮の隣に三重塔が描かれているが、これは築十数年ころであるから最も古い記録の部類に入るであろう。

『新編相模国風土記稿』[天保 12（1841）年編纂]には、絵地図の説明に三重塔は「山の中腹にあり、元禄六年、杉山検校造立にて五智如来を安ず」と書かれている。また護摩堂は「正観音および弁

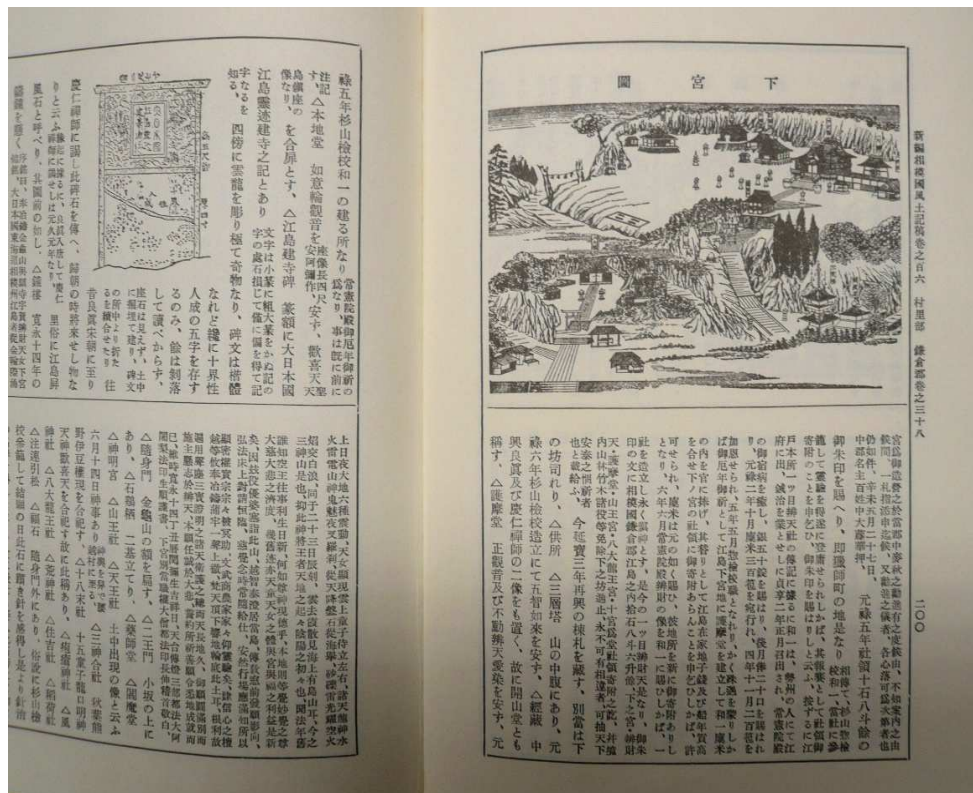


金亀山江島図（宝永・正徳ころ）

動・弁天・愛染を安ず。元禄五年、杉山検校和一の建るところなり。常憲院殿（第5代將軍 徳川綱吉 1642～1709の^{おくりな}諡）御厄年御祈の為なり」と記載され杉山和一は護摩堂も寄進していたのである。

さらに同書には「元禄五年、社領十石八斗余の御朱印を賜へり。即ち漁師町の地これなり。相伝へて杉山惣検校和一、当社に参籠して靈験を得、遂に登庸せられしかば、報賽として社領御寄付のことを申乞ひ、御朱印を賜りしといふ。按ずるに江戸本所一ツ目弁天社の伝記に拠るに、和一は勢州の人にて江府に出、鍼治を業とせしに、貞享二(1685)年正月召出され常憲院殿の御宿病を癒し銀五十錠を賜り後、月俸二十口を賜れり。元禄二(1689)年十月^{りんまい}廩米三百匁を宛行され四年十一月二百匁を加恩せられ五年五月惣検校職となれり。かく殊遇を蒙りしかば御厄年御祈として江島下宮地に護摩堂を建立して和一廩米の内を宮に捧げ其替りとして江島在家地子銭および船年貢高を合せ下宮の社領に御寄付あらんことを申乞ひしかば許可せられ廩米は元の如く賜ひ彼地所を新に御寄付ありしとなり。六年六月常憲院殿、弁財の像を和一に賜りしかば一社を建立して永く鎮神とす。是、今の一ツ目弁財天（注：現在の墨田区千歳 1-8 江島杉山神社）是なり。御朱印の文に相模国鎌倉郡江島之内、十石八斗六升余、下宮、弁財天、護摩堂、山王宮、

八大竜王、十宮為堂、社領寄付之請、^{ならび}に境内山林竹木緒役等免除下之場進止、
 永く不可有相違者、可抽天下安奉之悃祈者也と載給ふ。」という記述があり、杉山
 和一検校が寄進したことが詳述されている。(西暦、注、ルビ、句読点は筆者)



新編相模國風土記稿（杉山和一についての記述）

ちなみに現在の辺津宮・中津宮・奥津宮は当時、下ノ宮・上ノ宮・本宮御旅所
 と称していた。御旅所とは台風被害を避けるため4月最初の巳の日から10月最
 初の亥の日までの間、弁財天を岩屋からは本殿に移したことによるという。

杉山和一の生い立ちと江の島信仰

杉山和一（1610～1694）は管鍼法という鍼治療の方法を考案したことで有名で
 ある。また、その方法を『杉山流三部書』という書物に著し、管鍼法を教授する
 学校「鍼治講習所」を開設して、盲人の職業として鍼灸・按摩が成立するよう
 にして後進を育成、指導した功績は大きい。

和一は伊勢国藤堂藩の家臣杉山権右衛門重政の長男として慶長 15(1610)年に
 生まれた。幼名を養慶といい 10 歳のとき天然痘を患って失明したため家督を継

ぐことが出来ず、17歳のとき江戸へ出て検校山瀬琢一・鍼医入江豊明に弟子入りし和一と改名して鍼術を学んだが一向に上達せず破門されてしまう。途方に暮れた和一は技芸の神、弁財天にすがろうと江の島へ行く。岩本院を訪ねたがその風体が貧相だったため、参籠はおろか島内滞在も断られ追放されようとしたが下ノ坊がその身柄を預かり岩本院と折衝してくれて、やっと岩屋参籠が叶い 21 日間の断食参籠を終え、帰途についた和一は石につまずき転倒する。その石は福石といって今でも境内にあり、説明板には以下のように書かれている。

「和一は（中略）満願の日の帰り道にこの石につまずき気を失ってしまいました。すると夢の中で美しい五色の雲に乗って弁財天が現れたので、手を合わせて拝もうとしたところ何やらちくちくと身体を刺すものがありました。そこで夢から覚め、手にとってみると、松葉の入った竹の筒（筆者注：一説には丸まったスダジイの枯葉）でした。これにヒントを得て管鍼の術を考案して、その元祖となり、それによって徳川綱吉の病を治療し、関東惣検校に栄進したといわれています」



福石と道標

管鍼法とは、細い治療用の針を思う位置に正しく打てるように管をガイドにする方法で、こんにち世界で行われている鍼治療は皆この方法によっている。

貞享 2（1685）年正月、杉山検校が 75 歳の時、召出されて第 5 代將軍徳川綱吉の持病であった悪性の関節リュウマチを、わずか数日で癒し、禄 500 石を賜る。その後さらに 300 石加増された。さらに元禄 6（1693）年になると長年の功勞に対し、綱吉から「何か望みはないか」と訊かれ「一つでいいから目が欲しい」と答えて、本所一つ目の地所 1 町四方（3600 坪）を拝領した。和一はそこに鍼治講習所と弁天堂を建て、江の島弁財天のおかげと、この年、江の島三重塔を寄進したのである。

余談だが、戊年生れの綱吉は犬保護がエスカレートして「殺生憐みの令」という悪法を敷いたことで有名で犬公方とあだ名された。和一も戊年である。和一がこれほど優遇されたのは戊年同士ウマが合ったからではないか、と筆者はにらんでいる。

現在その敷地（江東区千歳 1-8）には江島杉山神社と杉山和一資料館が建っている。本殿の右隣には江の島の岩屋を模した弁天堂がある。



江島杉山神社

杉山検校は江の島弁財天を厚く信仰し、下ノ宮に三重塔や護摩堂を建立しただけでなく、その三年前の元禄 2（1689）年には藤沢宿から江の島までの道に花崗岩でできた道標を 1 丁おきに 48 基建てた。表面には梵字の下に変体仮名で「恵能之満遍（えのしまへ）」向って右側面「一切衆生」左側面「二世安楽」と彫られた石柱（藤沢市指定文化財）が 14 基現存することは、ご存じの方も多いであろう。

杉山検校の墓は東京本所弥勒寺（墨田区立川 1-4）と江の島内と計 2 か所にある。

江の島の墓石の表面には元禄七甲戌年五月十八日 前惣検校即明院殿眼叟元清大僧都、裏面には元禄八乙亥年五月十八日、杉山安兵衛、三島惣検校と刻まれ、一周忌に建てられたことが判る。遺骨は本所の弥勒寺にあると思われていたが、江の島に埋葬されていたことが後に分ったそうである。和一が寛文 10（1670）年検校となって 250 年目に当たる大正 7（1918）年、杉山検校 250 年祭に際して江の島の墓所修復がなされた折、大甕の中に座った遺骨が発見された。甕の蓋に「伊勢国津生 杉山和一即明院殿眼叟元清大僧都 元禄七年五月十八日」と刻まれていたという。

なお、杉山検校の顕彰碑は方々にあり、山形県上山市、福島県白河市、同福島市、三重県津市（ここには木彫座像もある）、大阪市などに建てられている。

三重塔は島のどこに建てられていたか

藤沢市文書館は「新編相模国風土記稿」や「江の島岩本院の近世古文書」など江の島の古地図が収載された資料を多種収蔵していて、1989 年 7 月～9 月「江の島絵図展」を開催した。その展示資料を見ると、時代を追って 10 枚の絵図が示されている。それらを見ると塔の位置が明確に判る。それは現在の参道の上り坂を上がりきった大鳥居脇の駐在所を右へ折れて陸橋をくぐった右側で三重塔撤去の後、明治 19（1886）年から昭和 35（1960）年までの間、片瀬小学校の分教場

が建てられていた。その後、市の寮になっていたが、いまは江の島市民の家が建っている場所がそうである。

この場所は、島の対岸から見れば非常によく見える位置で、絵師が見落とすようなものではない。浮世絵に登場するのも尤もである。絵師のみならず、一般の参詣者からも、よい目印になったと思われる。

また、三重塔の大きさはどのようなものであったか。岩本院蔵古文書に 2 間 (3.6 m) 四方との記載があるから、比較的こじんまりした塔であった。高さは現存する他の三重塔から類推すると 17~8m 前後だったであろう。九輪塔から最上階の屋根の四隅に支線が張られ、各層の軒下の四隅には風鐸が下げられていたことが判る図もある。

いつ失われたか

明治政府は神道国教化を図るため、明治元(1868)年 3 月 13 日および 4 月 10 日に太政官布告を発令し、神仏習合を禁止した。この真の目的は全信仰を神道に帰一し、仏教滅亡を意図したものであった。明治 6 (1873) 年 3 月、神仏分離が強行され、全国各地で廃仏毀釈が行われた結果、多くの仏教建築や仏像仏具が破壊され廃寺となった。

江の島では明治元年、布告に伴い総別当岩本院が神祇をもって奉斎することとし上ノ坊、下ノ坊も同調して上ノ宮・下ノ宮・岩屋の三社祭の施行を政府に申し出た。明治 3 年、三坊はそれぞれ神官となり、島内の御師を社家に取り立てるよう請願した。翌年社家 20 名は職名の願書を提出し、江の島神社領は神奈川県在所轄になったのである。

明治 6 年、神仏分離が実施され、江の島大明神は郷社江の島神社と改称し、奥津宮拝殿を建設、辺津宮拝殿の改築がなされた。三重塔をはじめ、仁王門などは、このとき取り壊しを命じられたという。

弁才天はもともとは仏教の守護神天部の一つだが、神仏習合によって神道にも取り込まれた。また才は財に通じると弁財天と称するようになり商売繁栄の神とされるようになった。



八臂弁財天 江の島神社蔵

江の島弁財天は源頼朝が奥州征伐の戦勝を期して文覚上人に命じて岩屋に勧請したという。それは八臂の像で八本の手に弓、矢、矛、斧、長杵、鉄輪、縄索の八種の武器を持つ戦勝護国の神であった。のち二臂に枇杷と撥を持つ妙音弁財天も祀られ、繁昌技芸の神とされた。一方、三重塔は釈迦の遺骨（仏舎利）を収めるものだから、廃仏毀釈のターゲットにされたのである。

この三重塔は冒頭にも述べたように元禄 6（1693）年から明治 6（1873）年まで 180 年もの長い間、庶民の目に親しまれて来たものが、今や、古地図や僅かに浮世絵に描かれたことによって、辛うじてその存在が知られるのみ、というのはいかにも淋しいことである。

ちなみに、江の島のほかに廃仏毀釈によって破壊された三重塔には、紀州東照宮（和歌山県）、諏訪大社・下社（長野県）、吉備津神社（岡山県）、日御碕神社（島根県）の 4 基がある。

一方、全国に現存する三重塔は 105 基あり、国宝 13 基、重要文化財 43 基、県・市指定文化財 44 基、未指定 5 基であり圧倒的に関西に多い。なかでも最古のものは奈良県斑鳩町の法起寺の塔で 1312 年前の 706 年の建立である。

関東地方では以下の 13 基の三重塔が現存する。

	所在地	寺名	建立年	塔高	文化財指定	備考
埼玉県	行田市	成就院	1729 年	11.2m	県指定	
	川口市	西福寺	1693 年	25.0m	県指定	
	比企郡吉見町	安楽寺	1652 年	24.0m	県指定	
栃木県	日光市	輪王寺	1690 年	15.0m	重文	
	栃木市	高勝寺	1751 年	21.0m	県指定	
	芳賀郡益子町	西明寺	1537 年	17.6m	重文	
茨城県	つくばみらい市	願成寺	1779 年	25.0m	県指定	
	桜川市	薬王院	1704 年	25.0m	県指定	
	〃	小山寺	1465 年	21.8m	重文	
千葉県	成田市	新勝寺	1712 年	25.0m	重文	
	山武郡芝山町	観音教寺	1836 年	25.0m	県指定	
東京都	文京区	椿山荘	室町頃	18.5m	なし	竹林寺より移築
神奈川県	横浜市中区	三溪園	1457 年	22.4m	重文	燈明寺より移築
群馬県	なし					

移築の 2 基を除けば関東にある三重塔の建設年代は杉山和一が建てた 1693 年の前後 20 年に集中しているのは興味深い。当時、関東では三重塔を寄進することが信者の願望だったのだろうか。

以上の関東地区の同時代の塔を参考にすれば『江の島三重塔再建』は技術的にも可能であろう。島内に平成 5（1993）年に江の島大師が出来たという事は神仏習合に戻ったようなものだから、仏舍利塔の再建は問題ないのではないか。もし再建されれば観光名所が一つ増えるというものだ。

おわりに

偶像崇拜を認めぬタリバーンによって 2001 年に世界遺産であるバーミヤンの摩崖仏が破壊されたとき、「なんと愚かな」と思ったが、明治政府が発令した神仏分離令が引き起こした廃仏毀釈は、日本全土に及び、夥しい数の貴重な文化遺産を失ったのはそれ以上の愚行だったと言わざるを得ない。今年、明治維新 150 年に当たり、その功罪が見直されているが、罪のほうの最大のものの一つであることは間違いないであろう。

（おかだ てつあき）

参考文献

- 「江島考」呉文炳著 昭和 16 年 書物展望社刊
- 「江之島 片瀬・こし越」浅野桜魂著 昭和 16 年 江島神社刊
- 「江の島歴史散歩」内海恒雄著
- 「江の島の今昔」高野修著
- 「江の島絵図展：付属資料」藤沢市文書館 1989 年
- 「江の島の記念碑が語るその人の歴史」江の島・藤沢ガイドクラブ
- 「江の島岩本楼今昔物語」岩本二郎著 昭和 50 年 私家版
- 「江戸時代の鎌倉・江の島めぐり」神奈川県公文書館 平成 29 年展示
- 「浮世絵館だより（1）」藤沢浮世絵館 2016 年
- 「杉山和一に関する調査報告：江の島道の道標と各地の遺徳顕彰碑など」
筑波技術大学テクノレポート 2009 年
- 藤沢市電子博物館「みゆネット」藤沢市教育委員会編（掲載許可取得）
- 藤沢市立藤沢浮世絵館収蔵品（掲載許可取得）

葛巻義敏氏を追って

神谷 祐太（会員）

はじめに

芥川はベッドの上にひとりで不貞腐れ坐っていたが、甥の葛巻を見ると、
「なんだ、おまえまで来たのか。帰れ」
と、叱り飛ばした。

葛巻は泣きながら出ていくと、あとは芥川と、文子、小穴の三人だけになった。

（松本清張「芥川龍之介の死」『昭和史発掘 2』文芸春秋 1974 年）

葛巻義敏は芥川の甥にあたる人物である。どれだけの人が現在その名を知っているだろうか。唐突ながら、松本清張の大著の中にその名がみられるため、冒頭にて紹介した。ちなみに、引用部は、芥川が自殺を完遂する年の四月、帝国ホテルの一室にて心中未遂を起こした直後の場面である。本作は事実とフィクションを交互に交えた作品であり、この場面の描写自体は松本清張の創作に過ぎない。

それでは、実在の葛巻義敏とはいかなる人物だったのだろうか。葛巻の足跡を追ううちに、彼が特に晩年の芥川と深いかかわりを持ち、若い頃は武者小路実篤を師と仰ぎ、芥川の死後は堀辰雄や坂口安吾などの著名な作家とも親しくしていた事実がわかった。

また芥川研究に欠かすことの出来ない、多くの原稿や資料を葛巻が保管していた点も明らかとなった。さらに保管のみならず、彼自身も『芥川龍之介全集』や『芥川龍之介未定稿集』などの編集に関与していたことは、その後の芥川研究に計り知れない影響を与えた。それにもかかわらず、葛巻に関するまとまった研究や著述はいまだ乏しい。

そこで、本稿では『芥川龍之介全集』の編集者であり文芸評論家である葛巻義敏について扱う。葛巻本人が残した文書と併せて、妹左登子の回顧録、および親交のあった人物の書簡や著述を追うことによって、葛巻義敏の人物像に迫りたい。

葛巻義敏と芥川龍之介

それではまず芥川龍之介が亡くなるまでの葛巻義敏の経歴についてみてゆくことにしよう。彼の経歴を今に伝える資料には、短いながらもまとまったものとしては、1954年10月発売の『明治大正文學研究』(季刊第十四號「芥川龍之介研究」)における吉田精一との対談「芥川龍之介を語る」、および1967年に旺文社より刊行された芥川龍之介の短編集『舞踏会』の解説の中に収められている、葛巻本人が著した「叔父・芥川龍之介のこと」、並びに妹の葛巻左登子が晩年の1992年に記した「兄のことに就いて一付・芥川龍之介の終焉のこと」の三点がある。加えて、断片的に葛巻自身と芥川との関係性を物語る資料としては、『芥川龍之介全集』(1935)に収録されている書簡と、葛巻が編集した『芥川龍之介未定稿集』の「はじめに」と全編を通して葛巻が付した「編者註」がある。これらの資料を用いながら、ひとまず、葛巻の青少年時代を炙り出してみよう。

葛巻義敏は芥川龍之介の姉ひさと獣医葛巻義定の長男として、明治42(1909)年8月25日、内藤新宿にて誕生する。この時、叔父の芥川龍之介は十七歳である。一歳のころに、両親が離婚したため、葛巻は生まれたばかりの妹左登子とともに、芥川龍之介の実父新原敏三に引き取られた。ここにはひさの兄である新原得二が経営する牧場があるところで、芥川もたびたび訪れており、芥川と葛巻が最初に出会った場所でもある。

1922(大正11)年、神明小学校を卒業し、東京高等師範学校附属中学校(現筑波大学付属中学校・高等学校)に入学する。中学一年の夏にクルップ性肺炎を患ったため療養と通学の便を考慮し、田端にある龍之介の養父の芥川道章(1849-1928)宅に住まい、一時期生活をする。しかし二学期の後半からは、田端から芝の新原家に再び戻る。

1923(大正12)年、「大叔父の不用意な一言」をきっかけに家出をし、銀座にある出版社「北隆館」にて雑用をこなす「小僧」として働く。およそ半年後、彼の消息を追っていた道章によって発見され、彼は連れ戻される。その後は田端の芥川宅や葛巻の母ひさの再婚先である西川家にて暮らす。

しかし、その後も登校拒否騒動を引き起こし、中学校を退学してしまう。その理由について、当時、新進気鋭の作家として注目を集め始めていた叔父芥川龍之介に対する反感が少なからずあったことを、後に葛巻は告白している。葛巻自身は芥川らとは一線を画す「白樺」派の武者小路実篤や志賀直哉らに私淑していた

ため、叔父の存在を疎ましく感じ、たびたび叔父をはじめ家族や親類に対して反抗的な態度をとった。やはり後にそのことを認め、「今日の私はその無軌道ぶりを否定する」として反省の弁を述べている。

葛巻は 1920 年、小学五年生の頃から、単独で武者小路実篤主催の勉強会「日曜の集い」に参加したという。このことから、彼は、不登校騒動を起こした際には、かねてより「新しき村」運動に共鳴し、入村を強く希望していたこともあり、そこに参加するつもりであつたらしい。大叔母ふきから強い反対を受けたものの、どうしても、入村の夢をあきらめきれなかった葛巻は、大正 12 (1923) 年 8 月末に、実父の葛巻義定から入村の承認印を得るために北海道へ赴く。この話し合いの最中、関東大震災が起った。

9 月 16 日付の北海道滞在中の葛巻にあてた手紙の中で、芥川は「「新しき村」からは何も云って来ず、又武者がでて来てゐるにしろ、この大騒ぎちゃ居どころもわからない。」と述べ、武者小路らからの連絡がいまだ芥川家には届いていないことを伝えている。さらにこの手紙では、事態の収拾が進めば「新しき村」から連絡が来るかもしれないが、今はひとまず北海道の実父宅にて待機しているほうがよいと記している。葛巻は交通機関の復旧後、新原、西川両家とも全壊したため、比較的被害の少なかった田端の芥川家に戻った。ちなみに、この時期に記された武者小路実篤の日記や書簡を調べたが、管見の限り、葛巻入村の是非をめぐる記録は、見つけることができなかった。

こうした複雑な経緯を経て、葛巻にとって、芥川龍之介から勉強の手ほどきを受けながら雑用もこなす生活が始まった。当初、世間から脚光を浴びはじめた叔父の芥川に対して反感を抱き、家出をするなど反抗的な行動をとってきた葛巻ではあるが、二人の「共同生活」ともいべき暮らしの中で、感情を変化させていくことになる。

歳が離れた兄弟のような二人の共同生活は、芥川が自殺するその日まで続く。すなわち、1923 年から 1927 年までのおよそ五年間である。その様子について、葛巻本人が回顧録の中で触れている。それによると、朝の 9 時ごろから夕方の 6 時近くまで、夏目漱石、森鷗外、正岡子規などの全集を読むことを日課として課せられていたという。葛巻自身、十三歳の子供にそれらの文学作品を読むよう命じることが妥当な教育方針だったのかという疑問もあったようだが、この時の人生経験が後に役立ったと述べている。

彼が読書や勉強に励んだ部屋は、芥川が原稿を執筆している書斎に隣接していたため、ときには原稿の清書や整理などの作業を手伝うように声がかかることもあった。その時の芥川の状態について、葛巻は「それは最初多少堪えがたいほどにきびしいものであった。」と書き残している。しかしながら、厳しく接する中にも、冗談や皮肉交じりの会話を交わし、あだ名をつけてからかう芥川の置き手紙も残されており、葛巻が芥川に対して反発をおぼえていた時期とは打って変わって、両者は良好な関係を築いていったようである。

葛巻が芥川宅二階で龍之介と一緒に過ごすようになって二年目の秋、龍之介は彼の為に文芸回覧誌まで作っている。これは芥川の書き損じた原稿の裏面に、葛巻が散文を書くようになったことがきっかけだったようである。「丹波熊太郎」というペンネームまでつけて、芥川は「桂義輔に献ず」として、「おれの詩」「Melancholia」「ひとりあるもののうたへる」の三篇の詩に散文「商賈聖母」と、非常に短い五幕の戯曲「皇帝と皇子」を加えて体裁を整えたばかりか、『一束之花』と題し、表紙を付け装幀まで施すほどの凝りようだったのである。この逸話からも、芥川が教育もし、雑用も言いつけながら、他方で共に同人誌の作成を楽しむなど、いかに甥の葛巻をかわいがり、かつ葛巻の文学に対する才能も見出して期待をしていたかが分かるだろう。

彼らは単なる叔父と甥の関係、あるいは保護者と被保護者、教師と生徒という間柄を越えて、ときにおどけ合うなど、ひじょうに打ち解けあった年齢差のある友人関係ともいえるべき関係を構築し、「必要以上の冗談口もきき合ったり、遠慮ない態度で接しあったりした。」のである。彼らのくだけ口調で互いを呼び合う光景は、芥川の手簡集の中にもみられる。以下に、そのいくつかを紹介しよう。

この中にお金十円あり　これにてルナアルの「葡萄園の何とか」と原稿用紙十とちとを買い、餘りたるお金にて足りない畫の具をかうべし　筆も入れれば買てもよし。

エライ叔父　〔1924年9月〕二十三日朝　バカ甥さま

これは原稿用紙と本をかう用を命じ、余った費用で葛巻が必要なものをかうことを許す旨が記された置き手紙である。末尾に注目してほしい。自らを「エライ叔父」と名乗り、葛巻を「バカ甥さま」と呼ぶなど、これを書いた芥川笑顔が目

に浮かぶ。愉快的二人のやり取りを示す置手紙を含む往復書簡は 19 通あり、その中には「よつちゃん大王閣下」などのあて名で送ったものもある。

上記の引用では、芥川は原稿用紙を買ってくるように頼んでいるが、葛巻はこのような買い出しなどの雑用を多くこなしたようである。後年、葛巻は原稿用紙について「なお、彼は生涯、殆ど、この本郷の東大前にあった松屋文房具店製の、紺色罫の原稿用紙を使っていた。」と述懐している。これらの原稿の中には、芥川の代わりに購入したものが含まれていることは言うまでもないが、編集者以外に芥川の前稿用紙へのこだわりを今に伝えられるのは、葛巻が身近にいたからこそと言える。

引用中の「足りない畫の具」云々とあるのは、当時、葛巻が熱中していた繪画の道具を指す。彼が繪画に興味を示していたことを示す資料は他の書簡にもみられ、芥川が「レムブラン（原文ママ）のエッチング」や「スケッチ箱」を葛巻に買い与えたことが記されている。このことから、芥川が若い葛巻の美術に対する情熱にも理解を示し、彼の可能性を伸ばそうとしていたことがみてとれる。確かに葛巻には繪の才能があったようだ。前出の妹左登子によると、小学六年生の時に制作した版画が日比谷にある松本楼に飾られたという。

次に紹介するのは、芥川が保養先の軽井沢から、田端で暮らす葛巻へ宛てた手紙である。

軽井沢は涼しくて、ハイカラで、うまいものが沢山あつて、天国のやうなり。

小穴、佐々木夫妻が来てゐる上、堀もゐる故、一層賑やかなり。どうだ、羨ましからう。この画はがきの氷庫は僕の好きな建物故、ちょつとおがませる。

感涙にむせぶこと随意なり。

〔1925 年 8 月〕卅日 龍之介

芥川は、田端の自宅で留守番をしている葛巻に、快適な保養地での暮らしぶりを伝えて、甥を悔しがらせんとする、まるで子供のようなユーモアあふれる手紙を送っている。ここで登場する「小穴」「佐々木」「堀」というのは、それぞれ、画家の小穴隆一、小説家の佐佐木茂索、堀辰雄を指す。この三名は、芥川の自殺後に、まだ十七歳であつた葛巻の後見人となり、彼の成長を見守りながら、『芥川龍之介全集』の編集や芥川に関する資料編纂に共に携わった人物でもある。小穴

は芥川の存命中、葛巻に絵の手ほどきもし、彼をモデルにデッサンを描き、芥川のデスマスクも描いた人物である。小穴については後半でさらに詳しく触れる。

親密度を増していったように思える二人の生活は、芥川が自殺を遂げるその日まで続く。1925（大正 14）年頃、芥川は葛巻を連れて家出しかけたことも数回あった。その理由について左登子は家庭内の複雑さを挙げ、心情的には階下の家族とどんどん離れていったと述べている。同じ頃、葛巻は「アテネ・フランセ」でフランス留学資格の「ブルベ」の特典を得て、芥川を喜ばせてもいたという。

1927（昭和 2）年 7 月 23 日の晩、芥川は最後の作品となった『続西方の人』の執筆を終え、書斎の奥にある葛巻の寝起きする部屋へ顔を出し、「原稿にノンブルを打つので、お前の B2（原文ママ 筆者註：2 B）を貸してくれないか」と声を掛けた。絵画に熱中していた葛巻の部屋にはデッサンを描くために用いる 2B の鉛筆があるため、これを借りに来たのである。葛巻と少々雑談を交わした後、芥川は原稿を完成させるために自室へ戻り、翌朝、息を引き取った姿で同居していた大叔母ふきによって発見されるのである。

葛巻は晩年の芥川にとって最も身近におり、親子や兄弟にも似た、あるいはそれ以上の親密な間柄であった。それは次節で紹介する芥川の遺書からも明かされる。葛巻は芥川の彼に寄せた愛情を終生心の誇りとするようになるのだが、それが却って周囲との軋轢を生む要因ともなっていく。

芥川死後の葛巻義敏

『芥川龍之介全集』第 23 巻には全 5 通の遺書が収録されている。しかし、妻の文へ宛てた遺書は全集に収録されているものとは別に非公開のものが存在する。その内容について、葛巻左登子が回顧録の中で触れている。

文子ハ義敏ノ生活ヲ三年以上保証スル義務ヲ有ス。何ントナレバ、余ハ葛巻義敏ヲ最も愛スレバナリ。

公表されていない遺書の中には以上の項目があった。つまり、芥川は自身の死後も、最も愛すればこそ、甥の葛巻が生活に困らないようにと、書き残していたのである。この遺言は妻文によって忠実に守られることになる。

芥川の死後、葛巻が遺稿の管理や出版社との折衝など著作物に関する一切の権

限を有した。十七歳の葛巻にこのような大役が与えられた理由として、原稿の清書などの作業に携わっていた葛巻が最も適役であると周囲が判断したことが考えられるが、それまで芥川家の財産を管理してきた養父の芥川道章が龍之介の死から1年後の1928年に他界したことも大きいのだろう。また幼い三人の子供を育てねばならなかった文や老齢の大叔母ふきに、出版関連の仕事をこなせるはずもなく、それらの仕事は自然と葛巻に一任されるようになったと思われる。葛巻は、芥川自殺直後から始まった岩波書店の『芥川龍之介全集』の編集に、佐佐木茂索、小島政二郎、堀辰夫とともに参加し、初巻は同年11月に刊行されている。

芥川死後の葛巻の動向を伝える資料には、画家小穴隆一と、葛巻の異父妹であり後に龍之介の長男比呂志の妻となった随筆家芥川瑠璃子（1916-2007）の随筆がある。加えて、坂口安吾（1906-1955）の随筆や、堀辰雄（1904-1953）の書簡等からも葛巻の様子を窺い知ることが出来る。

芥川瑠璃子の『影燈籠—芥川家の人々』（1991）には、芥川の自殺後、残された家族や親類が如何にして過ごしたかが克明に記載されている。当然、芥川の遺稿を管理する葛巻も登場するのだが、名前ではなく「K」ないし「YK」などイニシャルで語られる。家族以外の人間に対しイニシャルの表記が用いられる場合は、プライバシー尊重がその理由として考えられるが、芥川家で暮らす他の家族や親戚の名は記されるにもかかわらず、葛巻だけが一貫してイニシャルのみの扱いとなる。また瑠璃子は葛巻のことを「かんしゃく持ち」な性格であったといい、芥川自殺後の葛巻は怒鳴り散らすことが多く、家族と口論になった際には「この家で一番えらい」というのが葛巻の常套文句になっていたと瑠璃子は述懐している。遺稿の管理や出版社との交渉を担っていた葛巻が強い自負心を抱いていたことや、家族との間にたびたび衝突が起き、芥川本家と葛巻の関係が決して良好ではなかったことを本書は物語っている。

この頃の葛巻の様子を知るもう一つの手がかりとなるのが、前出の小穴隆一（1894-1966）の随筆『二つの繪』（1956）である。小穴は芥川の無二の親友であり、芥川作品の装幀を手掛けたことでも知られる。さらに自殺直後の芥川の顔を描いた人物でもある。小穴が葛巻をモデルに絵を描く様子を、芥川は日記に記している。妹の左登子も「芥川叔父と暮らしつゝも小穴画伯に洋画を教えて貰ったりし」と述べており、葛巻にとってはもう一人の近い保護者ともいえるべき存在だったと言える。芥川は小穴との書簡のやり取りの中で、たびたび「甥の坊

主君」を話題にしている。その中で、葛巻に「何かにありつく習慣」がつきはじめていることを、芥川は懸念して、小穴の下へ葛巻が訪れた際には一切何もくれてやるなと念を押す一文まで書き残している。大人の間で暮らす中、葛巻はいつの間にか、与えられる生活に慣れ始め出したことがみてとれる。

しかしながら、芥川の死後しばらくすると、葛巻と小穴の関係に軋轢が生じることとなる。その原因について、小穴は葛巻が生前の芥川の未発表の原稿を含む著作に関する一切の権利を独占し、芥川家に暮らしながらも、芥川本家の人々に対し心を開くこともなく、また独占した版權を譲渡する気配もなかったためだと記している。芥川瑠璃子が葛巻に対して抱いていた嫌悪感の理由について、彼女は随筆の中で詳しく述べていない。だが、同時期の芥川家について綴っている小穴の随筆から、芥川家における当時の葛巻の立ち位置を知ることが出来る。

小穴は葛巻のことを、「家ダニ」と呼び、強い不快の念をあらわにしている。

芥川が死ぬとたちまち、「芥川龍之介の跡継は自分だ。この家の物はなにかならなにまで自分のものだ」（昭和九年に奥さんが僕の家で語る）と芥川家の家ダニになつてゐるのである。

小穴はほかにも、芥川が妻文にあてた遺書の、「三年間は葛巻の面倒を見よ。」という文言を、葛巻自身は三十年厄介をかけるつもりではないかなど、強い嫌悪を表明している。小穴は生前の芥川とは無論、芥川死後の芥川家と親しい間柄にあったため、おそらく一般には公開されていない芥川の遺書を目にする立場にあったのだろう。さらに、小穴は、「葛巻は共産黨、芥川の死を境に妙な人間となつてしまつてゐる。」と述べているように、葛巻が共産黨支部に属し活動していると指摘し、もはや小穴の手に負えない人間になつてしまったと言わんばかりである。

芥川家や小穴との関係悪化の一方で、葛巻は『全集』の編集に携わりながらも、東京神田にあるアテネ・フランセへ通い続けていたようである。1929（昭和4）年には、同校でフランス語を学んでいた坂口安吾らと知り合い、仲間ともに、フランス語の詩を和訳したものなどを載せる「同人雑誌」を作成することになる。『言葉』は後に、フランス語の翻訳のみならず、自作の小説を掲載する同人誌『青い馬』となった。

坂口は後に当時のことを、『処女作前後の思ひ出』(1946)、『暗い青春』(1947)、『青い絨毯』(1955)という随筆で回顧し、葛巻との交流やその人となりについても詳しく述べている。葛巻の主導のもと、同人誌を岩波書店から出版することにし、二人は交渉にあたった。同人誌の出版を渋る岩波に対して、『芥川龍之介全集』の出版差し止めを求めることもできると、怒りのあまり脅迫ともとれる発言をして出版の承諾をさせた葛巻の印象を、坂口は以下のように述べている。少し長いが引用する。

彼の全身は怒りのためにふるへてゐた。葛巻は良家の躰よく育てられた礼儀正しい少年で、自分の意志を率直な言葉で表現することのできない弱気な貴公子といふ風で、私は彼の怒つたのを見たことすらこのとき一度あるのみ、ふだんはウンザリするほど煮えきらない人だ。それがあつた種の立場に立つと、先方の事情などは全然思ひやらず、これほど大胆向ふ見ずに自分の利益を主張できるものかと思ひ知つて、呆れもしたが感動もした。私などにはない坊ちゃんの純粹さを見たのである。

坂口の弁を借りるならば「弱気な貴公子」といった印象の葛巻であるが、芥川龍之介の著作物に関する権利を己が有していることに対する自負心は、小穴の叙述でも触れられていた通り、並々ならぬものがあつたようである。しかしながら、先述した芥川瑠璃子の指摘した葛巻の癩癪持ちで怒りっぽい性格とは異なり、坂口らアテネ・フランセの仲間の前では、怒りをあらわにすることはない人物として捉えられていたらしい。上記のとおり、坂口も、葛巻が怒る姿を見たのは、この一回きりだと回想している。

さらに葛巻の性格に関して、坂口は「一見優柔不断な葛巻は、然し、最大の執拗さを以て、あれこれと廻りくどい表現で自説を固執してやまない。私はどうしても負けてしまふ。」とも述べている。葛巻が芥川家の人々や小穴と、陰悪な関係に至った背景にも、勿論、印税の分配をめぐるトラブルが第一にあつたのだろうが、坂口が閉口するほどの「執拗さ」も一因であつたと思われる。

葛巻が芥川家の人々とよく衝突していたように、坂口とも程度の差こそあれよく口論を繰り広げていようだ。その時の様子は、よほど坂口の印象に残つたとみえ、以下のように証言している。

葛巻がすねはじめると、僕は怒気満々、食ってかかる勢いで口論になるのであったが、葛巻は女性のように柔和な病弱にも拘わらず、自説の執着に至っては話の外で、おだやかな言い方と、弱々しい微笑と、持って廻った表現で、最後の最後まで食いさがる。結局僕の根負けであった。

ここでも、葛巻との言い争いになると坂口は結局引き下がってしまったことを告白し、葛巻は自分の意見にひどく固執する性質で、決して自説を曲げない性格の男であったことが伺える。前述した瑠璃子の証言によれば、葛巻は怒りっぽい性格であり、自分が一番芥川家で偉いという傲慢な態度を通していたことを指摘されていただけであった。これに対して、坂口らの前で普段は柔和でかつ優柔不断、その上穏やかな口調で話すなど、葛巻が「女性のように」な面を見せていた点は興味深い。芥川瑠璃子の語る人物とは別人のような印象を受ける。

坂口が書き残した葛巻に関する言及は、田端の芥川宅に訪れた際の思い出が大半を占めている。坂口は葛巻とともに、前述したフランス語の翻訳や執筆活動を、生前龍之介が多くの著作を執筆した芥川宅二階の書斎で行っていた。この時、彼らが翻訳したのは、ジャン・コクトーのエリック・サティ論であり、それに詳細な補注を付したが、それは『言葉』ではなく、『青い馬』創刊号（1931）に掲載された。

当時の葛巻について、坂口は以下のように、振り返っている。

葛巻は、私の横で小説を書いてゐる。これが又、私の翻訳どころの早さではない。遅筆の叔父とはあべこべ、水車の如く、一夜のうちに百枚以上の小説を書いてしまふ。この速力は私の知る限りでは空前絶後で、尤も彼は一つも発表しなかつた。

葛巻の執筆の速さに感嘆している坂口のコメントだが、葛巻が書いたものを破棄してしまい一切発表しなかったことについても触れている。葛巻がここまで同人誌の作成に打ち込んだ動機として、坂口は葛巻が当時思いをよせていた女性の存在を指摘している。

己れの愛情に就て葛巻は至極率直で、この愛情は一方的な片思いにすぎない

のだが、葛巻は万事友人に隠しておらぬ。ただ令嬢に向ってだけ打開けることができないという気の毒なものであった。

葛巻がある令嬢に対して真剣に恋をし、そのことを彼が周りの友人に隠していなかったことについて述べられている。また、葛巻が書いたものを破棄してしまい、後世にその作品が残らなかった遠因に、葛巻の失恋があったことも示唆されている。

坂口が本格的に作家生活に入ることになった、アテネ・フランセ時代の同人誌づくりのメンバーの中で、とりわけ中心的な役割を果たしていた葛巻を、二十年近くたってから三回にわたって書き起こしていることから、坂口が共に青春時代を過ごした葛巻を懐かしむと同時に、いかに葛巻の存在が坂口にとって大きかったのか、その印象が鮮烈であったかがわかる。

坂口安吾の随筆の中でも特に注目に値するのは、葛巻の健康についての記述である。

葛巻はカリエスだった。胸のレントゲン写真を私に見せ、自分も頬杖をついて眺めてをり、どう？　ちよつと、いやね、と言ふ。クスリと大人のやうな笑ひ方をする。そして、君は健康だねえ、と言ふ。

上記の引用では、葛巻がカリエスを患い闘病していた様子を伝えている。また、葛巻が不眠症に悩まされ、鎮静催眠薬カルモチンを過剰に服用している様子についても、坂口は触れている。このときの、心身ともに衰弱した様子について、葛巻自身も「病弱だったこれまでの生涯」と表している。そのことを裏付けるもう一つの資料として、作家堀辰雄が葛巻にあてた手紙 があり、その中で頻りに葛巻の体調を気遣う言葉が使われているのである。

ちなみに、葛巻は肋膜に菌が入りこむことで発症するカリエスを患っているが、叔父の芥川も、1921（大正 10）年の中国旅行の際に、上海逗留中に、乾性肋膜炎を発症し三週間ほど入院生活を送っている。また、芥川の実父新原敏三はスペイン風邪で亡くなり、芥川龍之介の息子比呂志も肺結核で亡くなっていることなどから、肺を病みやすい家系であったことは容易に推測できる。芥川は体調を崩して以降、睡眠薬や鎮痛剤を過剰に服用する生活を送り、最終的には、薬物の多

量摂取によりその生涯を閉じた。だが、やがて甥の葛巻自身も、病床に伏し「カルモチンをはぶ飲み」して倒れるように眠る生活をするようになるとは思ってもみないことだっただろう。

坂口らと『青い馬』の出版のためにさかんに執筆活動を行っていた二、三年前に、葛巻と一緒に『芥川龍之介全集』の編纂に携わっていた堀辰雄の勧めで、堀の主催する同人誌『驢馬』11号（1928）に、小説を投稿していた。堀は葛巻の文章を「非常に読者を疲れさせるものを持ってゐる」と葛巻に宛てた手紙の中で評し、忌憚のない意見を述べた。『青い馬』刊行にあたって彼が坂口を辟易させるほど粘り強く良いものを書こうとしたのも、この時の堀の批評が無関係ではなかっただろう。

おわりに

1935年に『芥川龍之介全集』全十巻の編集に携わった後の葛巻は、フランス語の学習を熱心に行っていたにも拘らず、フランスに留学することもなく、また、自らが描いた絵画や小説を発表することもなかった。葛巻がなぜ絵画や小説を一切残さなかったか、あるいは、戦後に再び執筆あるいは創作活動に専念しなかったのか、その理由についてなにも述べていない。先に紹介した坂口の指摘の通り、令嬢に対する情熱から葛巻は小説や同人誌を熱心に制作していた。だが、彼はすべての作品を「破りすてて結局一作も発表はしなかった」のである。

それは推察するに、彼が期待していたほどの評価を周囲から得られなかったことが大きかったのかもしれない。もちろん、カリエスの発症など身体的な理由から、留学や創作を断念したことは想像できる。だが留学に関していうならば、妹の左登子は1925年に、フランス留学の資格である「ブルベ」をすでに得ていたというのだが、「ブルベ」とはフランス語を教える資格のことであり、留学資格を指さない。このことから、葛巻が妹には見栄を張ってそう言ったとも考えられる。芥川の手簡にひとつもブルベについての言及がないことは不自然であると言わざるを得ない。晩年の芥川に最もかわいがられたという強い自負心と彼の虚栄心が、小穴や瑠璃子にみられる葛巻に対する嫌悪を生む要因となったのだろう。

さらに葛巻が芥川家から疎まれる大きな要因として、芥川の遺稿や手帳などの独占が挙げられるだろう。しかし、葛巻が独占したおかげで、戦火による焼失を免れたこともまた否めないのである。また、葛巻が全集の編集や未定稿集の翻刻

を行ったため、現在、多くの未発表の原稿を活字で読むことが出来る。このことがその後の芥川研究に大きく寄与したことは確かである。葛巻には定職に就いた形跡は見られないが、芥川が残した原稿を編纂して刊行したり、芥川の作品や生涯に関する著作を著わしたりするなどして収入を得ていた。それらは、『日本文学アルバム』（筑摩書房、1954 年）、『私のノート 椒圖志異』（ひまわり社、1955 年）、『近代作家研究アルバム・芥川龍之介』（筑摩書房、1964 年）、『芥川龍之介未定稿集』（岩波書店、1968 年）、『芥川龍之介未定稿集・デッサン集』（雪華社、1971 年）である。

これらの著作に収録された、芥川に関連する資料は、繰り返すが、葛巻が「遺稿を詰めた大型トランクと起居を共にして」守ってきたため、戦時下に焼失することを免れ、全集や未定稿集に収められるに至ったのである。しかしながら、1968 年に『芥川龍之介未定稿集』が刊行されて間もなく、当時住んでいた家が火災に遭い、資料の一部は焼失してしまう。その上、葛巻は生活費を捻出するために、1969 年以降数回にわたって資料の一部を懇意にしていた神田神保町にある古書店三茶書房の店主岩森亀一に、資料を散逸させないことを条件に売却している。

それらは現在、山梨県立文学館に収められており、それ以外の資料は 1985 年の葛巻の亡き後、神奈川県藤沢市鵜沼在住の妹左登子に引き継がれた。その左登子は、1997 年、入院を契機に、保管していた資料を藤沢市に寄贈した。これらの貴重な資料群が「葛巻文庫」と名付けられて、現在藤沢市立文書館に所蔵されているのである。この寄贈に関しては、葛巻左登子が「鵜沼を語る会」の会員であったこともあり、同会が全面的に協力した。

葛巻義敏は 1985（昭和 60）年 12 月 16 日に 76 歳で亡くなった。死因は心不全だった。しかしながら、芥川瑠璃子は、葛巻の死について「食物の誤嚥による窒息死」と述べているうえ、没年も昭和 61（1986）年とし、いずれも正確ではない。さらに「それまでの K の仕事上のことは一応認めるとしても、私達にしてきた行為、人格上の行為に疑問を持っていた」と続けている。そのため、葛巻が芥川家を離れ、1960 年代に世田谷で暮らすようになって以降は、1968 年の火災騒動の際に一度会ったのみで、それ以降は、全く連絡を取ることもなかったとも述べている。

葛巻義敏は、今日では芥川の甥であったことも、文芸評論家であったことも、また、岩波の初版『芥川龍之介全集』の編集者であったことさえも、世間からは

忘れ去られている。葛巻の名が現在知られていない原因は、彼が留学の夢を含め、画家や小説家としての道を自らの意志で閉ざしてしまい、作品を後世に残していないという点にある。その上、芥川家の身内や「親友」による葛巻に対する罵詈雑言もまた影響が大きかったものと思われる。

しかしながら、彼の周辺を丁寧にみていくと、芥川だけではなく、当時の文壇のこれまであまり知られていなかった側面が見えてくる意味でも、葛巻義敏の存在は興味が尽きないと言える。

今回、葛巻義敏の人となりをつぶやく資料として、主に坂口安吾の叙述を取り上げたが、次稿以降は、葛巻と堀辰雄との手紙のやりとり、葛巻と斎藤茂吉との関係、さらには、葛巻本人による悪評讒言への反論などが確認されているため、それらについて紹介したい。また、室生犀星をはじめ他の作家が記したものの中にも葛巻が登場するのか否か、引き続き、調査を続けたい。

(かみや ゆうた)

主要参考文献

芥川龍之介『芥川龍之介全集』（全 24 巻、岩波書店、1997 年）

芥川瑠璃子『影灯籠—芥川家の人々—』（人文書院、1991 年）

櫛原直樹『藤沢市文書館所蔵「葛巻文庫」と芥川龍之介資料——小学時代の回覧雑誌「日の出海」について——』（『藤沢市文書館紀要』1997 年 3 月）

岩森亀一『作家と古本屋』（日本古書通信社、1993 年）

小穴隆一『二つの繪』（中央公論社、1956 年）

葛巻左登子「兄のことに就いて 付・芥川龍之介の終焉のこと」『藤沢市文書館紀要』第 20 号（1997 年 3 月）

葛巻義敏「芥川龍之介資料『一束の花』」『図書』第 51 号（岩波書店、1953 年）

葛巻義敏編『私のノート 椒圖志異』（ひまわり社、1955 年）

葛巻義敏「叔父・芥川龍之介のこと」芥川龍之介『舞踏会』（旺文社、1967 年）

葛巻義敏編著『芥川龍之介未定稿集』（岩波書店、1968 年）

坂口安吾『坂口安吾全集』（全 18 巻、筑摩書房、1991 年）

祖父江昭二『近代日本文学への射程—その視角と基盤と—』（未来社、1998 年）

堀辰雄『堀辰雄全集』第 8 巻 書簡（筑摩書房、1978 年）

松本清張「芥川龍之介の死」『昭和史発掘 2』（文芸春秋 1974 年）

鵜沼と鎌倉との微妙な関わり合い意外誌(史)

内田 進之助 (会員)

生来、小生は地理と歴史にかなりの興味を持ち、それらに関する書籍や各種の地図を読み耽ったものだった。鵜沼に住んで既に五十余年、藤沢（特に鵜沼）と鎌倉との関連については格別の関心を抱き、掲題のことをここにしたためてみた。（既に十分ご存知の方々も多くおられるとは思いますが……）

鵜沼の起源

奈良時代の正倉院文書の中に、鵜沼付近を表す「高座（たかくら）郡、土甘（とかみ）郷」の地名が初見される（後にこの土甘に「砥上」の字があてられ、それが現在の「石上」に変化したと云う）。平安時代になり石楯尾（いわだてお）神社が、後にこの社地に鳥森皇大神宮が創建され、この地の中心となる。その後、平安時代末期に伊勢皇大神宮に寄進された大庭御厨（おおばのみくりや）と云われる荘園の一部として鵜沼郷が設けられた。

当時、東側は西方に向かってかなり蛇行迂回していた境川（当時の呼称は「固瀬川」、なお現在の江ノ電石上駅と柳小路駅との間には昭和 25 年まで川袋という駅があったが、それは曲がりくねったこの川を表しているものと思われる）と西側の引地川との間のこの辺りの地域を開拓したのは、相模の国の住人だった鎌倉景正（別名：平景正又は鎌倉権五郎）である。

鵜（くぐい）は白鳥のことで、湿地や河跡湖が幾つかあったこの周辺に多く飛来していたと云われている。

鎌倉の由来

そもそも「鎌倉」という地名は、既に奈良時代に古事記や正倉院文書などに記載されている。また、縄文時代から弥生時代にかけての遺跡もあり、杉本寺、長谷寺、甘縄神明神社のように奈良時代創建と伝えられる寺社もある。

その地名の由来については諸説あり、竈（かまど）のような形で海岸に向かって開いた浸食谷の多い特有の地形を表しているとか、或いはここを訪れた藤原鎌足が見た夢に従って鎌槍（即ち、鎌）を埋めたことに因んで武器の貯蔵庫を意味

しているのだとか云われている。

市内東部の金沢街道に沿った浄妙寺の境内にある鎌埋稻荷の石碑に、ここが「鎌倉」の起源であると書き記されている。

(なお些か個人的な余談になるが、小生の出生地である兵庫県や武庫郡、更に六甲という山の名－「むこ」の読み変え－ など、いずれも武器庫を意味している)

鎌倉時代以前の鎌倉と鶴沼

鎌倉は既に奈良時代、大化の改新以来より関東・東北の辺境平定と開拓に当たっての重要な軍事拠点であって、八世紀前半には郡衙(郡役所)が存在していた遺跡も発見されている。

大伴家持は相模守としてこの付近に赴任していたと云われ、万葉集にもこの地名が登場する和歌が三首ある。

鎌倉の 見越しの崎の 岩崩えの 君が悔ゆべき 心は持たじ

まかなしみ さ寝に我は行く 鎌倉の 美奈能瀬河に 潮満つなむか

薪伐る 鎌倉山の 木垂る木を 松と汝が言はば 恋ひつつやあらむ

平安時代に入ると、十一世紀に平忠常の乱・前九年の役・後三年の役と東国諸方での兵乱が続発したが、これらを平定する源頼義の活動が顕著となる。彼は当時鎌倉を領地としていた平直方の娘との間に八幡太郎義家を儲けてここに居住するとともに、京都南の石清水八幡宮を勧請して鶴岡八幡宮の前身である由比の若宮(元八幡)を創建している。

鎌倉時代以前の鎌倉への道は、陰阻で波風の影響の強かった海岸を經由せず、当時の郡衙が現在の鎌倉駅西にあったこともあり、鶴沼地域の山の手から東に向かって、化粧(けわい)坂や大仏坂を通っていた。

また、幕府開設後も当初は極楽寺坂が経路であったが、その後、鶴沼・片瀬を經由する海岸寄りが主要経路となった。

源義朝の鶴沼・大庭への乱入とその後の鶴沼

鶴沼と言う地名は前記のように既に鎌倉幕府発足以前に郷名として設けられて

いたらしい。十二世紀中頃（鎌倉幕府創設前）既に鎌倉にいた源義朝が大庭御厨に乱入し、神人8人を殺傷したが、その際、通過地であった鵜沼郷の魚・大豆・小豆等を奪取したとの記録が伊勢神宮の「天養記」に出ている。これが地名としての鵜沼の初出である。その後、鵜沼郷は鎌倉幕府の直轄領となり、本村と称する九集落が出来ていたが、海岸側は砥上が原と呼ばれる寂しい砂浜であったらしい（砥上という地名はその後、石上という名に簡略化された）。

西行、源実朝、鴨長明、冷泉為相らの歌人がこの辺りの寂しさを詠みこんだ和歌が残っている。

西行

芝まとふ 葛のしげみに 妻こめて 砥上が原に 牡鹿鳴くな里

実朝

秋風に なに匂ふらむ 藤袴 主はふりにし 宿と知らずや

長明

八松の 八千代の影に おもなれて とがみが原に 色も替らし
浦近き 砥上が原に 駒止めて 固瀬の川の 潮をぞ待つ

為相

立帰る 名残や春に 結びけん 砥上が原の 葛の冬枯れ

鎌倉時代の東海道

律令時代に設けられた五畿七道の一つであった東海道の始点は京都。相模国に入る前には、沼津から永倉を経て横走（現在の御殿場）を通ったあと、国府津から大磯まで相模湾沿い（海岸寄りよりやや山側）を東に進み、相模川を渡って、平塚、藤沢を経て海岸に近づき、鵜沼、片瀬から腰越、七里ガ浜、極楽寺付近を通り過ぎ、長谷を経て、鎌倉の中心地に到達することとなっていた。

更に鎌倉から東国への延長路は三浦半島を通過し、走水から浦賀水道を船で渡って房総半島に入っていた。

当時の片瀬との関連の逸話としては、日蓮和尚の龍ノ口法難の際、事件を伝える使者と赦免を伝える使者とが偶々七里ガ浜で行き合ったから、その橋を「行

合橋」、その下の川が「行合川」と名付けられたと云われている。

片瀬・腰越 — 鵜沼と鎌倉との境界地としての

鵜沼から鎌倉への境界地である腰越の地名の由来は、相模湾に向かって突出している小動岬まで続いていた高台を越えるために輿に乗る（特に高齢者や女性が）必要があったからだ、と云われている（即ち「輿越え」）。

更に他の伝説としては、鎌倉深沢にあった湖に住んでいた五頭龍という怪物が津村に住んでいた長者の子供たち十六人すべてを食い尽くしたので、その近くにあった高台を通る道が「子死越」と云われたとのことで、その後、五頭龍は江ノ島の弁財天に悪行を戒められ、龍口明神社に守護神となって祀られているとされている。

また鎌倉幕府創設の頃（1185 年）、源義経が宿敵平家討伐のためのそれまでのかなりの功績にかなう官位（検非違使）を予め長兄の頼朝の了解を得ずに朝廷より受領したため、頼朝との面会を拒絶され続け、留めおかれた腰越の満福寺で書いたと云われている「腰越状」と称する手紙が今もそこに残っている。これは朝廷側による分断工作に両者がまんまとはまったことを表している。

その後江戸時代初期には、腰越は幕府の代官がおさめる直轄地であったが、実質的には当時その地の土豪だった島村氏が取り仕切っていた。

しかし苛烈な徴税と横暴な行政を行ったため、村民たちが反発して幕府に訴え、津村と腰越村と称された二村に分かれた。

また片瀬は明治時代に片瀬村と江ノ島村が合併して川口村と称されていたが、昭和初期に鎌倉郡片瀬町となり、昭和 22 年に藤沢市に編入合併された。

稲村が崎と由比が浜 — 新田義貞の攻撃進路

腰越から東、稲村が崎までの海浜は七里ガ浜と云われている。距離は僅か 1.5 キロメートルしかないのになぜ「七里」と呼ぶのか、その理由には諸説ある。

鎌倉時代、関東では 6 町を 1 里とし、鶴岡八幡宮から裏鬼門（南西）の方角に腰越までを「浜七里」と呼んだからという説が強い。

稲村が崎と呼ばれる岬の名称は、東側の鎌倉市内中心部の浜辺から由比が浜を通して眺めたら稲穂を重ねたように見えるからだと言われている。

鎌倉時代末期、新田義貞が幕府討伐を目指して関東北部の領地から攻め込んだが、その経路は関東西部で幾つかの戦闘を繰り返しつつ、藤沢、鵜沼周辺を通り

過ぎ（経路の民家に放火し）、稲村が崎に至ったが、当時の波打ち際はかなり切り立った断崖となっており（現在のような台地を切り開いて通り抜ける路などは当然なく）、浜辺には嚴重な逆茂木が仕掛けられ、海上には幕府の軍船も多数浮かんでいて、軍勢は簡単には通過できないので、義貞が潮を引かすよう念じて剣を投じたら、潮が引いて干潟となったので、部下たちは感動し、驚喜して攻め入ったという伝説が太平記に記されている。しかし、これは全くの偽りであり、干潮の時刻を予め知っていた義貞が海象に疎い関東北部の兵士の士気を鼓舞しただけのことと思われる。

実際には、かなりの犠牲者を出して極楽寺寄りのやや低い山（靈仙山）を越えたのである。その節、犠牲となって死んだ配下の武将たちを弔う「十一人塚」が極楽寺寄りの道路に沿った処に建立されている。

北条氏を滅亡させたあとの義貞は、ライバルであった足利尊氏との確執に負け、北陸に落ちて結局は敗死した。

鎌倉幕府崩壊後(室町時代・江戸時代)の鵠沼・江之島と鎌倉

室町時代の藤沢、特に鵠沼については、あまり資料がない。

鎌倉幕府を開いた源頼朝が元来、生粋の京都人であったのとは全く対照的に足利尊氏は鎌倉生まれの鎌倉育ちであったが、京都に幕府を開いた。尊氏は軍事の拠点である鎌倉よりは、流通経済の中心地である京都を拠点として、選んだのである。

鎌倉には関東管領が置かれ、大庭御厨はその支配下に入った。十五世紀前半、関東管領の一族扇谷上杉家が大庭御厨を支配することとなり、その家臣であった太田道灌が大庭城を修理築城したと伝えられる。

十六世紀初期、上杉家の大庭城が北条早雲の攻撃を受け、落城させられ、その後、鵠沼村は北条早雲家の馬廻役であった岩本太郎左衛門の知行地となった。この所謂「後北条家」は勢力の広げ方は本来の「鎌倉北条家」と殆ど同様であったが、結局歴代は鎌倉を拠点とせず、小田原に留まり、一時は西の豊臣氏と並立する政権を確立したものの、結局は四代で滅ぼされたのである。

十六世紀終わり頃、鵠沼村は徳川幕府の幕領となり、十八世紀には海岸の砂丘地帯に相州砲術訓練場が設置された。

江戸時代の鎌倉は政治の表舞台に立つことは殆どなくなったが、徳川光圀が「新編鎌倉史」を編纂・刊行した結果、数々の名所・史跡が有名となり、その後は江

戸近郊の遊樂地となった。

また江之島は頼朝が弁財天をそこに勧請した以降は、幕府貴族と高僧以外が訪れるのは禁止された修業のための霊地となり、庶民にとっては近づき難いところであったが、江戸時代になると開放されて、大山参りの経路に加えられ、観光地としてかなりの人気地となったのである。

明治以後の鵠沼と鎌倉

明治維新後は、鵠沼も鎌倉も神奈川県管轄下となり、明治 19 年に鵠沼海岸海水浴場が開設され、その後、鵠沼館・對江館・東屋などの名旅館が開業、20 年に東海道線（横浜・国府津間）が開通し、藤沢停車場が開設された。これを機に旧鉄砲場跡の砂原地帯で我が国最初の別荘地開発が始められた。

明治 35 年に江ノ島電鉄が開業、藤沢駅から鵠沼東側を通過し、片瀬駅（現江ノ島駅）まで開通した。なお、それ以前から東京（渋谷・目黒・五反田）及び横浜から鎌倉までと藤沢・鵠沼・江ノ島までを結ぶ多数の私鉄路線建設が計画されたが、結局は現在の小田急線以外は実現されなかった。

明治 41 年に藤沢大坂町、鵠沼村、明治村が合併して、神奈川県高座郡藤沢町が発足し、その後昭和 15 年に藤沢市となる。なおその一年前に鵠沼と鎌倉とのつなぎ目にあった鎌倉郡腰越町は鎌倉町と合併した。

鎌倉町は、東は六浦、東南は小坪、北は山内が境界地であり、西は笛田・手広・津村・片瀬を現在の藤沢市との境界地とした。これら周辺地域は、戦前はすべて鎌倉郡と呼ばれていた。

なお、この境界周辺に存在する龍口寺の住所は藤沢市片瀬三丁目となっているが、そのすぐに西隣にある龍口明神社の住所は鎌倉市腰越となっており、藤沢市域に囲まれた小さな鎌倉市の飛び地となっている。この神社の創建は 538 年又は 552 年と云われており、鎌倉に現存する神社としては最も古く、玉依姫命と五頭龍大神が祭神で、鎌倉時代には刑場となっていた時期があり、氏子たちが祟りを恐れて移転を拒んだためといわれている。

なお、江ノ電はその後、明治 36 年に田辺（現在の七里ヶ浜駅付近）、37 年に極楽寺、40 年に大町、43 年に漸く小町（現在の鎌倉駅接続地）まで開通、8 年 9 ヶ月かけて全線開通したのである。

さて、昭和 4 年小田急江ノ島線が開通したが、藤沢駅と鵠沼海岸駅との間に設けた駅の名について、それよりかなり早く開通していた江ノ電の鵠沼駅は本来の

鵜沼地域より遙か東方に偏しているので、こっちが本来の「鵜沼」だと云いたい近隣住民の強い要望に従って「鵜沼本町」又は「本鵜沼」という駅名を候補とし、結局本鵜沼駅となった（江ノ電鵜沼駅の西口前の賀来神社の外壁に「鵜沼本町駅」と書かれた方角案内の石碑が今でもある）。

戦後と現代

鎌倉郡片瀬町は昭和 22 年藤沢市に合併された（江之島は片瀬町に属していたので、本来は藤沢市外だった）。

この合併の際、片瀬町は「江之島市」という新市名を主張したが、藤沢側の強い反対により、結局は「藤沢市」となることに譲歩したと云われている。

江の島は昭和 39 年の東京オリンピックのヨット会場となったが、それまで文化財保護法による名勝史跡指定解除をめぐる紆余曲折していた江の島の「湘南港」の建設が実行された。

以上、思いつくまま、かなりの駄文を記し続けてきたが、際限もないので、これで終わらせて頂くこととしたい。何れにしても私にとって鵜沼と鎌倉との関わり合いについては興味が尽きない。

（うちだ しんのすけ）

鵠沼のつれづれ

今井 達夫

鵠沼のいい季節のひとつに、僕は晩秋初冬の十日ほどをあげる。大した影響被害をあたえられない海岸だが、すでに台風はすぎさった。

冬の寒さのひどく嫌いな僕だが、そういう寒さはまだやって来ない。むしろ、はっきりとあたたかな日和がつづくのである。山茶花が咲き、雪柳もぼつちりと白いものをつけはじめる。いや、こんなふうには三十二相を並べ立てると、かえって、魅力を失ってしまう。女人の描写と同様に、ひとつだけ強調したい。

僕は世界に名だたる夕焼けをひとつも見えていないから、比較は不可能である。しかし、夕焼けの美しさは、ひとの気持をひくものなのだろう。だからこそ、マニラ湾の夕焼けなど有名になっているのだろうが、鵠沼の夕焼けについて誰も推していないのを不思議に思う僕である。だが、僕は海岸に出て空一杯の夕焼けを見ようとしな。家の二階の机の前にすわって見るのである。見るというより、そのなかにつつまれるのである。もちろん、空一杯の夕焼けの美しさをさけるのではない。

数年前、房州白浜の旅館のバルコンで見た夕焼けの美しさは、描写の言葉を思いつかないほど大きかった。太平洋が赤く染まり、大島と利島が薄紅色と薄青色にかすんだのを息をつめて眺めつくした。ところが、その夕焼けはほんのみじかい時間のうちに色褪せてしまった。

それとくらべて、書斎の窓を染める鵠沼の夕焼けははるかに長い時間僕をつつんでいてくれる。僕はどんなに忙しいときでもペンをすてその中にじっくり自分をおきつけ、その中に溶け込みたい願いを抱く。まるで、夕焼けは停止したかの感さえあたえてくれるのである。夕焼けが停止したというべきか、時間が停止したと思うべきか、僕は自分で透明になって行くのをかんじるのである。僕はその時間書斎にすることができるのを、幸福な身分とさえ思う。このことは今までに誰にもしやべったことがない。はじめての告白である。

きれいな冬がすぎ春が来る。しかし、もうひとつの好きな季節の到来には、まだ、ほど遠い。僕はその到来を指折りかぞえるほどに待ちこがれる。その季節とは、晩春初夏の候である。からだをつつむ重い衣類はすでに消え去り、うっとうしい梅雨はまだやって来ない。一日ごとに濃くなって来た青葉は、さらに濃くな

った。僕の住居は大変いい環境にめぐまれていて、条件の筆がしらは庭の向うが二千坪ほどの屋敷になっていることである。二階から建物の見えないのも人里はなれたおもむきだが、まるっきり手入れをほどこさないその視野がそういう印象をさらに高めている。よほどの将来はともかく、しばらくは現状のままという話で、塀も垣根もなく自然にまかせっきりだ。随分以前に植えた松に藤づるがからみひとりでに生えて来た竹などのある邸だが、春になるとここに、ニセアカシヤがはびこってくる。

ニセアカシヤという木は大変精力的で、戦時中見学に引っぱり出された足尾銅山のふもとの廃土の土どめに植えたのが、旺盛に繁っているのを見た。そんな土にさえたちまち根を張るのである。鵠沼にはいつて来たのは明治時代で、一面の砂っ原に松と一緒に防風乃至土留めが目的だったらしいと植木屋がいった。彼は尚つづけて、

「根を張って植木を枯らす仕様のないやつなのですよ。」

と、憎々しげにこいつをにらんだものだ。なるほど、知らぬうちに数メートルも根を張り、随所から芽を出す。芽が出たと思うと、ぐいぐい伸びはじめ、数週とたたないうちに三メートルから五メートルほどまで成長し、枝を張って大木のおもかげを呈する。毎年根を掘りおこし切り捨てて十余年になるが、また季節になるとひょいひょいあらわれるのである。植木屋のいう通りほかの木を枯らしたりするが、それ自体は決して醜い訳ではなく、庭向うの屋敷で放置するニセアカシヤの密林を眺めるのは壮観という言葉を思わせるものがある。しかし、この樹木の成長過程は別の機会にゆずろう。枝を張り新芽が若葉になり、それがたくましい青葉にひろがって幹も枝も隠れるほどしげころ、白い花房が葉隠れにのぞきはじめる。すると、僕の好きな季節が訪れて来るのである。

僕の寝坊はもはや習慣というより規則正しい生活になりおおせ、俗事をいえば電話は十一時と十二時のあいだなら朝食をとっている部屋にいるからと宣言しているくらいだが、この季節にはいくらか早起きになって、八時ごろ目を覚ます。

僕は雨戸と障子をあけてそのまま寝床に長いあいだ横になっている。そとの風景を眺め、新鮮な空気を吸う。青葉といろいろな花の匂いを含んだ空気は、甘く胸の底までしのびこんで来る。幸福をかんじるひとときである。僕は寝つきも目覚めもいい方だが、この季節に花をひらくに似た目覚めを味わうと、これこそほんとの目覚めだとかんじるのである。

だが、この花ひらくがごとき目覚めは、この季節だけのものであり、一年に一

度か二度訪れて来るだけである。少年のころはじめて味わったこの目覚めは、しかし、毎年きっと訪れてくれる。僕は生きていることに幸福をかんじ、満ち足りた想いの恍惚状態を息をひそめて長持ちさせる。それはたぶん季節の温度が僕の皮膚に飽和状態をつくるためであろう。もちろん、こういう経験は僕だけのものではないにちがいないが、この経験も今まで誰にもしゃべったことがなかった。

ここではじめてうちあけることである。生きていることの幸福といったが、それだけではないのである。からだ中の細胞が新しく生きかえった思いすら伴って来るのである。僕は毎朝寝床で二種類の新聞を読み、残りを朝食の食卓でコーヒーとともに読む習慣をつづけているが、この花ひらく目覚めの朝は新聞を手にしらない。世のなかにどのようなことが起こっていようと、僕は隔離された状態をほしいままに求めつづける。からだ中、頭のなかまで透明になって行く実感は、味わえばしんしんと訴えて来るからである。

こういう日、僕は俗事を一切排除する。朝食ののち、目的のない散歩に出かけるのもそのためである。鵠沼も随分開発されたが、幸いなことにまだ妨げなく散歩の足を延ばすことができる。道をえらべば、ごくたまに人に逢うだけであり、自転車にさえ出会わないですませる散歩ができる。空気は甘いままさまざまな匂いを伝えて来るが、松の花粉や思いがけぬ花の匂いのなかには日常生活のそれを含んでいない。歩いているうちに次第に放心状態におちいり、空白になったあたまのなかに浮かんで来るのは、人事をはなれた空想だけである。

(いまい たつお)

編集注

この小文は『墨のらくがき』誌（昭和 40 年 2 月号：東京美術院刊 廃刊）に掲載されたものだが、同出版社は現在存在せず、転載許可は得られていない。

今井 達夫（1904 - 1978 年）

鵠沼にゆかりのある作家のひとり。横浜生まれだが小学 3 年生のときから関東大震災までの 12 年間、そして戦後 1947 年より没するまで鵠沼に居住した。

慶應義塾大学中退、博文館、時事新報社を経て文筆活動に入る。小説「青い鳥を探す法」を「三田文学」に連載し、同作品で第二回三田文学賞を受賞。ほかに中間小説の長編・短編集 50 冊と評伝『水上瀧太郎』などがある。

鵠沼を語る会では未発表作品を会誌に掲載、また文士達との交流を取り上げた『馬込文学村二十年』と『鵠沼物語』を冊子化している。

コーヒーブレイク Coffee Break コーヒーブレイク Coffee Break コーヒーブレイク

戌年に因んで

今年の干支は戌年、誰でもご存知ですね。昨年までの2年間、申年、酉年について皆さんから聞いたり、雑記欄に記してあった事を思い出しながらコーヒーブレイク欄に投稿、今年は戌年についてペンを立ててみました。

私は申年で戌年とは犬猿（敬遠）の仲と云われ気性上、犬に追われっ放しと云われています。現役時代、私は戌年の上司の営業業務の遠吠えに反発を覚えることがしばしば、努めて控えながらも何時か一矢を報いたいと思いつつも果たせぬまま、定年を迎えてしまいました。尤も上司は他へ転勤後も皆に嫌われていたようで、多くの部下が難儀、被害を蒙った事はOB会の都度、話題にのびります。

戌年生れの人は一一般的に忠実と云われていますが、犬は賢く従順な動物で多くの方がペットとして飼っています。

犬のルーツを辿ると縄文時代、今から一万年前から犬は飼われていた証もあり、語られている犬の先祖は狼と云われています。現在の柴犬が遺伝的に狼と似ているとのことですが、いろいろ改良され現在、犬の種類は三百種くらいと云われています。以前は人間の食べ残しを食していましたが、それでは栄養不足で、くる病発生率が高く、犬のビタミン革命でドッグフードが開発され、犬専用のワンワンレストランもあるとか。

犬の逸話は忠犬ハチ公を始め、花咲か爺さんのここ掘れワンワン、名犬ラッシー、ワンワン物語、徳川綱吉のお犬様時代、プーチン大統領に贈った秋田犬、今TVで話題の秋田犬のワサオと数限りなく犬の存在感が大きくなっています。ハチ公の剥製は上野の科学博物館に保管され、都下御嶽山にはおいぬ様（狼）が祭られています。

今は家族同然、屋根の下で暮らし、庭や玄関先の犬小屋で犬を飼う家が減りました。小型犬だけではなく、中型犬、大型犬も室内で飼われているのが当たり前になりました。少子高齢化が進み孫と触れ合う機会が減り、犬が家族の代役を担いコンパニオンアニマルと呼ばれ、犬と一緒に食事をしたり、家族と散歩する習慣で早寝早起き、健康への意識が高まったとか。それに反し猿は狡賢く、農作物を荒らし人様の物品を勝手に盗むので嫌われています。

さて、戌年の今年の暦から運勢をみると、意欲旺盛、元気澁刺の運氣があり、いろいろな事に手を出し、多くを求め過ぎる懸念がありますので、行動する時は十分に計画を練って進行するよう心がけ、目上の引立てや周囲の協力を得られる

コーヒーブレイク Coffee Break コーヒーブレイク Coffee Break コーヒーブレイク

コーヒーブレイク Coffee Break コーヒーブレイク Coffee Break コーヒーブレイク

なら成就、好調の年となるでしょう、と記されています。自己中心を自重し、自己の能力範囲を充分留意し、「出る杭は打たれる」の諺を座右の銘にすれば素晴らしい年が期待できる、とありますが、晴耕雨読、お天気キャスターの森田正光さんによると自然現象の多くが周期的に起きるため戌年は豪雨災害に注意？とあります。海面水温が変動する「エルニーニョ現象」や「ラニーニャ現象」で地球規模の異常気象で、過去の戌年豪雨災害で 1958 年 9 月狩野川台風(犠牲者 1,269 名)、70 年 7 月関東南部集中豪雨、82 年 7 月長崎大水害(犠牲者 299 名)、94 年 9 月大阪府北部で局地的大雨、2006 年 7 月本州から九州にかけて記録的大雨(犠牲者 30 名)が列記され、戌年は災害が多い傾向と記されています。戌年に限らず短時間の大雨は夏を中心に記録的災害が観測されている感があります。

始めに犬猿の仲と申しましたが、申年生れの私、桃太郎の三匹の家来、雉・犬・猿が仲良く協力して悪者を退治する協力者の一人として、今年も平穏無事、ワンダフルな出会いがあることを望む所存です。(ワタヤ ヨシノブ)



湘南平のチョウ仲間

毎年5月の連休前になると、チョウ採集の大きな赤色の捕虫網を手にした顔見知り、湘南平のTV電波塔近くに集まる。春限定の綺麗なミヤマカラスアゲハが狙いだ。このチョウ、ほぼ決まったコースを飛んでくる。そこで採集ポイントが決まるが狭いエリアなので、早く到着したものが捕虫網を振る優先権を有す。

これは仲間たちの暗黙のルール。痛んでいない一頭をうまく採れたら、次に早くきた採集者にバトンタッチする。なかには待ちきれず割り込んで捕虫網を振る輩もいて、トラブルのもとになる。とにかくコレクターはライバルより少しでも多く欲しいものを手にしたいのが常。傍からみれば、60歳過ぎの「戻り虫屋」が集って必死に捕虫網を振るこのチョウ採集の様子は、かなり滑稽に見えるだろう。

少年の頃に手にした捕虫網は白色だったが、このアゲハチョウは赤色に反応し寄って来る。しかしネットの赤色にも違いがあるようで、寄って来る赤と余り来ない赤とがある。アゲハチョウには認識できるようで、採集成果に影響する。

春の湘南平に集うチョウ仲間はいつしか年末に集りその年の成果を自慢しあうようになった。素人からプロ紛いの者まで、仲間でもありライバルでもある。(弥)

コーヒーブレイク Coffee Break コーヒーブレイク Coffee Break コーヒーブレイク

わたしの鵠沼の思い出 <4>

鵠沼で出会った動物たち（哺乳類・鳥類） 1935(昭和 10)年頃～

内藤 喜嗣（会員）

『わたしの鵠沼の思い出』は4回目。今回は“我が家に到来するものは総て歓迎”という風潮のなかで、如何に動物たちと付き合い、触れ合ったかを話します。

《伝書鳩》

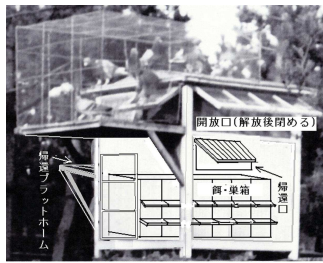
私が鵠沼の家で生まれて物心が付く以前から我が家に居た動物は、伝書鳩と中型犬のエアデルテリアのビリーでした。最初に当時は珍しい伝書鳩について話しますと、大きな鳩小屋で確か 10 羽が夫々に色の着いた足環をつけて飼われていました。これは殆どが番(つがい、雌雄一対)で、後で話に出てくる巣箱と一緒に入ったり、行動は雌雄一緒でした。

朝、小屋の一番上の大きな開きを開けると一斉に飛び立ち、群れになって空を飛びまわり、その間に、爺やか女中さんが小屋の掃除をして餌の準備をします。これを空から見ていたのが一斉に舞い降り、自分の餌場で餌を食べ始めます。餌は今のドッグフードの様なもので、大豆ほどの大きさの粒に仕立てられたものが当時、既にあり、餌のメーカーから月に一回届けられていました。

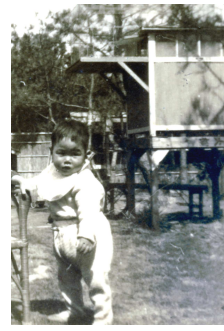
後で知ったのですが、この鳩たちは朝日新聞から訓練の依頼を受けて父が預かったもので、訓練は父の休みの日に朝の餌が済むと行われました。巣箱にいる番を後ろの小さな開きから捕まえ背中や足に通信筒を取り付け、運び籠に一番ずつ入れ大体二籠を自転車で目的地に運んで放したようです。電信の発達が無い時代、一直線に自分の巣箱に戻る鳩の特性を利用した早い通信手段として活用されました。戻った巣箱から番を捕まえ通信筒を取り外して、また仲間の元に戻します。

その後、我が家で高い尖った屋根の洋館の増築工事が行われると、屋根の天辺から巣箱が見渡せるのでなかなか巣箱に戻らなくなり、父は対策に木彫りの鷲の帽子掛けを改良、眼にビー玉を埋め込み、屋根の頂上近くの壁面に貼り付けていました。その効果のほどはわかりませんでした。

そして数年が経ち、1940(昭和 15)年の9月末に父が商工省の依頼で南米ブラジルに渡航することになりました。留守の間、訓練を湘南学園の熊田校長に預ける



鳩小屋と愛犬



ことになり、6年生の高島さんなど数人が鳩の世話と訓練をしてくれました。

ところが日中戦争が急を告げ、この鳩たちも「出征する」ことになり、朝日新聞のひとが受け取りに来て、小屋ともども戦地に行ったようです。

《イヌ》

次は飼い犬のことですが、ビリーという名の犬は父が日本エアデルテリア協会の会長を引き受けたことから我が家に來たものです。イギリスから輸入されたオスのおとなしい子で金網のゲージのある犬舎で飼われ、姉のお気に入りの子でした。血統が良いのが人気で、よくお嫁さんが連れてこられゲージで、じゃれあっていました。しかしある朝、可哀相に口から泡を吹いて死んでいました。市川獣医さんによれば「泥棒が犬の吠えるのを止めるために毒を盛ったのでは」とのこと。

その後に来た犬はメスのドーベルマンのアルザーでした。警察犬の訓練を受けた賢く機敏な犬で、ドーベルマンは気性がきついといわれていましたが、おとなしい良い犬でしたので皆と良く遊びました。そのうち父が南方軍でサイゴンに行って留守をしている間に、以前、片瀬海岸に完成した乃木大将の銅像に座間の連隊から戦車隊をつれて参拝に來た飯野参謀の使いと言う陸軍の士官が我が家に立ち寄り、「お国のためにお借りします」とアルザーを連れ去りました。それ以来、戦時中は我が家では犬は飼いませんでした。

戦後、1946(昭和21)年春、我が家に野菜を届けてくれる鶴沼堀川の浅場さんの小母さんが「家で可愛い犬の子が生まれたけど、要らないか？」と声をかけてくれ

たので、妹を自転車に乗せ見に行きました。ブチの斑点のある子犬ですっかり気に入入り、妹のためにはじめて屋内で飼うことにしました。この犬の親は柴犬だったのに育つと可愛いテリヤとなり、ジローと名付けられ家の人気者になりました。

翌 22 年に今度は天金の裏のお嫁さんの実家に住んでいる除隊したハワイの二世 G I の大石さんが夫婦で帰国するので、「お宅で飼って欲しい」とシェパードの雄犬シャーマンを連れてきました。この犬は堂々とした体格でしたが、子供のときの管理から片耳が立っていませんでした。「血統書はあるけれど軍用犬として採用されず、払い下げられた」とのことでした。早速、ゲージを改修し大型の犬小屋をつくり、庭の周囲に金網を張り、夜は番犬として庭に放しました。そして、調教師を雇い訓練を始め、一段落してから横浜の警察犬訓練所に預け本格的に訓練し捜査犬の登録を済ませました。この犬は頭がよく家族の誰の命令にも従い、先のジローとも相性がよく戯れあっていました。

そんな中、今度はサンフランシスコに帰る二世の松岡松雄夫妻が、ワイヤーヘアフォックステリアのベックを置いていきましたが、この犬は気性がきつく厄介者でした。我が家に来たときは手入れが悪く、毛が伸びほうだいのぐしゃぐしゃで、早速ビリーの時の散髪用具でトリミングをしてやると、素敵なテリヤになりましたが直ぐに癩癩を起こし、人のベッドに潜り込んで寝ているくせに動かすと唸りを上げる犬でした。あるとき父がシャーマンの訓練をしていると家の中からベックが飛び出して飛び掛り、引き離そうとした父の手に噛み付いて負傷をさせてしまいました。そんなことでベックは家に来られた父の友人・鎌倉の菊岡さんの家に貰われていきました。



シャーマンは一回だけ捜査の仕事をしました。ある日の朝方3時頃に物音がしたので起きると、洋間のガラスが一枚はずされ泥棒が手を入れて鍵を開けようとした様でした。早速、シャーマンをゲージから放したが反応はありませんでした。6時頃に、はずされたガラスと足元のニオイを嗅がせ、追跡させてみました。家の門扉を乗り越え、前の松林を抜け遊歩道路沿いのアメリカ人の家の周りを廻り、三輪さんの松林(現マクドナルド・三笠会館の所)を抜け、肥え上げ路を西に行き、一の橋から鵜沼海岸駅に至りました。駅前の派出所の巡査、改札の駅員に事情を話しホームまで追跡したが、電車に乗ったらしく途絶えてしまいました。事件の発生直後に追跡させなかったのは残念でした。派出所で調書に協力して帰宅しました。この犬の一番の天敵は獣医の米倉先生でした。狂犬病の予防接種に来宅の時などは、到着と同時に唸り声を上げて怒りました。私がゲージに入り金網に体を押し付け、押さえ込んだところに先生が来て注射をする始末でした。

この犬は15才の1960(昭和35)年春、血尿をするようになり、先生が「安楽死をさせてあげなさい」と言われたので、彼の跳び廻った海岸の松林に連れて行き、預かった注射器で注射し、あの世に送り埋葬しました。

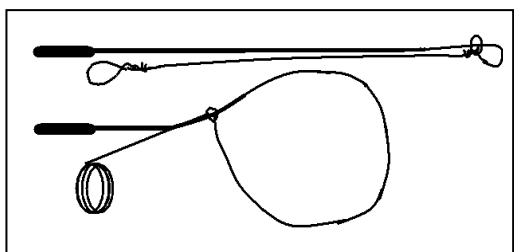
この間、昔の日本エアデルテリア協会の父の友人から二匹のオスの子犬が届けられ一匹は父の友人に譲り、もう一匹はハリーと名付け飼いました。お茶目の人懐っこい子でしたが内弁慶で、一才を迎え訓練を始めようとした矢先に門から跳び出して戻らず、方々手を回したが行方不明になり戻りませんでした。

ある日、出入りの植木屋さんが家の前で蹲っているオスのダックスフンドを見つけ、迷子犬というので取りあえず餌を与え警察・保健所に問い合わせ、電柱に迷子犬の張り紙をして預かりました。名が解らず名無でしたが、ホッピーと呼ぶようにしました。この犬は品種の習生か庭に居るヒキガエルの穴倉を見つけては、毒気にふれても泡を噴きながら掘り出し転がして、じゃれるのが好きでした。

我が家が捨て犬を飼うことが知られているのか、門前に置かれる捨て犬は後を絶ちません。夜脱走して街を徘徊して朝帰りをするコロ、拾われた時から顔の斑点がずれているビーグル犬の雑種の雌犬は懐っこく、じゃれ付く可愛い子でしたがブスと名付けられていました。日大の愛犬交歓会に何回か出したが何時も出戻って、一生を終えました。そして、犬の管理は長兄の犬好きの姪に移りました。

戦後、鵜沼海岸は一時期、野良犬と野良猫がはびこっていました。長谷川巳之吉氏が建て、戦後、米軍に接収された洋館にいたアメリカ人の大きな飼い犬のグレートデンは、夜な夜な脱走して野良犬のボスになり群れで鶏や飼い犬を襲いま

した。我が家でも渥美さんの家から貰い受けた可愛いウサギの家族が、一夜にして皆殺しにされました。そればかりか夜、帰宅中の人間にも悪さをするのが評判になり、近所では警察や保健所に退治の依頼をしていました。



皆さんは昔、「犬殺し」という職業があったのを覚えていますか？ 三人組で一人はリヤカーに檻を乗せて、二人が鋼(はがね)の針金で作った道具でロデオのように自転車の上から犬の首にかけて捕まえるのです。捕えられた放

れ犬は檻に入れられ連れ去られました。飼い犬も捕まると役場に行かないと返してくれないといわれていました。夜出没する野良犬の退治を頼んでも「仕事は昼間だけ」と取り合ってくれず、あれは本当に役所の雇い人だったのでしょうか？

《ネコ》

また海岸には野良猫が住みついていた。避妊処置がまだ一般的ではなく猫は沢山子を産みました。生まれた子の処分に困った人がなぜか、海岸に捨てに来るのです。子猫の死体をよく見かけましたが、生き延びた猫にとってここは餌としての鰯(干鰯・ほしか)が沢山あったのです。これらの野良猫は家々の台所や食卓を荒らしました。当時、電気冷蔵庫は無く氷の冷蔵庫は贅沢品で、殆どの家庭は網戸の付いた蝇帳に食べ物を入れていたのです。我が家でも猫は天敵でした。

野良猫との戦いでは、台所の裏の土間に残飯の魚の骨等を置いて引戸を少し開けて待っていると寄って来て漁り始めます。これをカーテンのレールに使う銅製の管を使った吹き矢で襲撃します。至近距離からの矢は必ず当たり飛び跳ねて逃げますが、また他の奴が来るというように沢山いたのです。父が釣った魚の干物など干すときは、ずっと見張っている始末でした。冬の気温は今よりも低かったせいか、土間向こうの竈でごはんを炊こうとすると中から暖をとっていた猫が飛び出すのはしょっちゅうです。一度は松葉を詰め込み、火をつけて暫くしたら中から枝のようなものが伸びてきました。かまわずに勢いよく松葉をくべて飯を炊き上げ、暫らくして釜を下ろしたら猫の丸焼けがあったなど、色々ありました。

ネズミは戦後、人家が増えるまであまり居ませんでした。それよりも折角植えた芝生をデコボコに荒らすモグラがいました。砂地の上に芝生を植えるには相当量の黒土を入れるのですが、この中にミミズがいたのが原因のようでした。庭師の小父さんがよく罌を仕掛けて獲っていました。

我が家に来た家畜

《ヒツジ》

さて、次に我が家に来た厄介な家畜のことを話します。戦時中、繊維統制令で今のようなニット(当時はメリヤス・編み物といていた)のセーターなどは貴重品で、母親たちが小さくなったりしたものを、解いて毛糸にして暇を見ては編み針で編み、セーターやマフラーに再製をしているのをよく見かけたものです。

そんなことが切っ掛けになったのか？ 父と有田さんの小父さんが相談したのか？ 5頭のメスのヒツジが我が家に連れて来られました。鵜沼木材から製材落としの端材と丸太の杭を得て、六畳ほどの柵囲いと杉皮屋根の小屋を作りました。

翌朝から首輪をつけたボスと思われる一頭の首に綱をつけて引き出し、海岸の松林に連れて行き、肩にかけてきたロープを数本の松の木に結んで囲いを造り、中に入れ一日草を食べさせ、夕方連れ帰るのでした。海岸の松林には草が沢山あり、毎日場所を変えて行いました。昼間は見張りをすることはありませんでしたが毎朝夕駆り出され度々、脱走したヒツジと松林で追いかっこをしました。

我が家にヒツジが来たのは10月頃でしたが、翌年の4月頃には毛がモコモコになり毛を刈ることにしました。前に話したビリーのトリミングに使ったバリカンと散髪用の粗刈り用のバリカンで御用聞き of 兄さん達の手を借りて、二三日かけて毛を刈りました。これからが大変で一番大きな釜で湯を沸かし、粉石鹼で女中さんが洗いましたが刈り取った毛の汚れは落ちず、鵜沼薬局に頼んだカセイソーダを使って茹でて洗いました。ゴム手袋など無い時代で女中さんは大変だったようです。そして結構な量があった羊毛は父が手に入れてきた紡ぎ器で母と姉が毛糸に紡ぎ桃色に染め上げて編みましたが、出来上がったのは二人の妹のセーター2枚だけでした。そんなことで夏前に、このヒツジ達を引き取ってもらいました。

《ヤギ》

ヒツジの柵囲いは戦後、ヤギの飼育に使用することになりましたが、これには前段があります。昔、鵜沼海岸には上野、浜野、石井などの牛乳屋があり毎朝、牛乳の家庭配達をしていましたが、何時からか牛乳が手に入らなくなりました。そんな時、昔から出入りしていた荻田の山口さんのおじいさんが「家の者(小父さん)が支那戦線から帰還した片目失明の傷病兵で畑仕事が出来ない。乳牛を2頭飼って搾乳業を始めたので、牛乳を買ってくれないか」ということで、双方が旨く折り合いました。早速、5リットルの搾乳缶を二缶用意して毎日、次兄と私が自転車で受け取りに行くことで話がつき、我が家の消費分と近所の赤ん坊に配る分が確

保されました。しかし、戦争が終って乳業が復活すると搾乳農家からの牛乳の買い付けがはじまり、我が家の割り当てがなくなっていました。

丁度その頃、ブラジルの東山(とうざん)農場の山本喜誉司博士(かつてブラジルのコーヒーが害虫に侵され絶滅すると問題になった折、天敵のハチを発見、養殖し、これにより害虫の駆除が成功したことからブラジル国家から荣誉勲章を授与された)のもとで仕事をされた斉藤博士が帰国し、岩手県の小岩井牧場に場長として就任したと家に挨拶に来られました。小岩井牧場は戦前、日本一の競争馬の生産牧場でしたがGHQから競馬禁止の通達が出て、畜産業へ切り替えるための指揮をとるとのことでした。その折に、当時、鵜沼南部で搾乳用のヤギの飼育が成されていたので、我が家での飼育を相談したところ、この地域の種雄の飼育の調査をしてくれました。それによると、なるべく血の離れた種を飼う方が良いとのことで、すべてお任せしました。後日、小岩井牧場から血統書付の3才の出産を終えた雌ヤギが我が家にやってきました。耳には登録済みのアルミのステッカーがパンチされており、早速、以前のヒツジの囲いに入れ搾乳場を作り、その日から乳搾りにかかりました。この仕事も私に押し付けられました。餌は一緒に届いた乾草を押し切りで細かく切り麦の麩(ふすま)を混ぜ与えましたが、その後は草を刈ったり、八百屋さんに頼んだ野菜くずを調達することにしました。とりあえず名前はメーコとしました。出産後一年で乳の出が悪くなるので、秋の交尾期(鳴き方が変わる、3週間置きに来る)に種雄の飼育先に予約して、種付け(交尾)させ春の出産を待ちます。鵜沼には葉山さんの門前の農家と鵜沼海岸駅の裏の秋田さんの家に種雄が飼われていました。翌春、運よく2頭のメスの子ヤギが生まれました。近所では、遊歩道路の片瀬との境に住んでいた友人の渥美さんが2頭の雌ヤギを飼っていたので情報交換して飼育しました。

早速、斉藤場長に報告すると「一週間後に協会の人が伺うから、指示にしたがってください」とのことでした。我が家のメーコには角が無かったので搾乳用の雌ヤギは角が無いものと思っていたら、ヤギはみんな角が生えるそうです。生まれて2週間ほどの間に生える場所に処置をしてとめるのだと初めて知りました。後に湘南学園にヤギを譲ったとき、このことを伝えるのを忘れ角が生えてしまう失敗をしました。親子3頭の飼育は結構大変で、ヒツジと同じように海岸の松林に連れて行き草を食べさせ、その間に夕飼(ゆうがい・夕方与える飼料)用と冬用の乾草づくりのために草刈りをして麻袋に入れ担いで帰り、庭先のコンクリートのロータリーに干しました。戦時中から庭先の松を切り倒し、食料増産の協力とし



母ヤギ



子ヤギ



子ヤギ

て小麦とサツマイモを植えていましたが、小麦は結構の収穫があり、物置に収納し、時々、堀川の製粉工場で製粉してもらいました。この時の粳(ふすま)で鶏を飼っていましたが、これをヤギの夕飼にも与えるので、他の農家の粳も調達しました。一年後の春にメーコからまた2頭のメス、秋にはこどもから4頭生まれましたが我が家では運よく総てメスで協会の斡旋で引き取られていきました。

《ニワトリ》

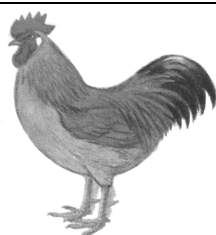
ニワトリは最初白いレグホンを5羽飼っていましたが、斉藤場長の指導で小岩井から茶褐色のロードアイランドレッド(茶色の卵で美味しく、栄養価が良い)の若鶏が10羽届き、半年後にまた10羽と都合30羽を分けて飼うことにしました。

これは、産卵の効率のためだそうで最初の若鶏が産卵を始め、ある時期を過ぎると鳥屋に就くといって、卵を抱いて温め卵を孵す(雛にする)ための母性が出て巣に座り込むようになり産卵が止まります。これらのニワトリは食肉にしました。

戦後、ラジオ放送の「話の泉」などで活躍された片瀬に住んでおられた渡辺紳一郎氏は、方々地方に行かれることが多く、あるとき高知から「東天紅」(東の空が赤くなると鳴き出すニワトリ)を買ったので飼ってくれと持って来られた。父は早速、庭に背の高い鶏小屋を作り預かりしました。噂にたがわず早朝に声高々に尾を引く鳴き声で鳴きましたが、早速、近所から咎められ仕方なく、江ノ島熱帯植物園で動物も飼っていたので頼み込んで引き取ってもらいました。



ニワトリを飼う



東天紅



チャボ



オオサンショウオ

そうしたら、今度は名古屋からチャボのオスとメス2羽が届き、これも朝は早くから鳴くので植物園行きとなりましたが、園ではこのニワトリたちを昼間は放し飼いにして人気だったそうです。

《大サンショウウオ》

父がまた変わったものとして、「紳チャンにこんなもの貰った」と大きな長箱を抱えて帰って来ました。中を見ると濡れた新聞紙が詰まっていた。しかし中にはなにもありませんでした。これは大変だと鵜沼海岸駅までを探しに戻ると、町では大騒ぎでした。得体の知らないものが道をはっていたのです。それは飛騨から貰ってきた60cmもの大サンショウウオだったのです。

丁度、四角の風呂桶を新しくしたところで、この風呂桶の古いのを地べたに半分埋め、栓を抜いたままにして電動ポンプで井戸水を流し込みました。餌はオタマジャクシ、蛙、ザリガニと言うので作橋西の地藏袋でとって来ましたが大変でした。しかし有田さんの御用聞き西山さんが牛のスジ肉の落としを持ってきて与えると良く食べたので問題解決となりました。しばらくして湘南学園の菅野先生にこのことを話したら子供たちに見せたいとのことで、またも学園に嫁入りとなり、風呂桶と子ども校舎裏の井戸のそばに移動して子供たちの飼育が始まりました。餌には有田さんから週2回スジ肉の落としをもらい届けましたが、生徒達はおたまじゃくし、赤蛙、ザリガニなどを取ってきて食べさせていたそうです。

野鳥たち

ニワトリの話をしたので私の野鳥との付き合いを思い出してみました（現在では野鳥の捕獲は全面禁止です。記録は過去のものです）。先日、タレントのモト冬木氏が善意でスズメを飼っていて咎められたことが、テレビや新聞で取り上げられていましたが、昔はおおらかに自然と係わっていたものでした。

野鳥については、藤沢市教育文化センター発行の「藤沢の鳥」「身近な川と水辺」などに詳しいので参考にしてください。

《サギ》

このスジ肉の落としとして思い出すのは、戦争末期の食糧難の時に藤が谷の交番前の空き地（現在の江ノ電鵜沼駅からの海岸通りと境川岸、下藤ヶ谷公園に掛かる土地）にサギのコロニー（サギ山）が出来ていたことです。小・中・大の白サギ・ゴイサギ・ササゴイ・アオサギが夕暮れになると埒（ねぐら）にしていますが、五月の末になると一斉に巣作りをして空色のきれいなニワトリより少し小ぶりの卵

を4個ほど生みました。そこで「早く獲りゆで卵にすると旨い」とのうわさが流れ、悪餓鬼供はお巡りさんの目を盗んで林に入り木の上の巣から卵を失敬したのです。

6月のある日、有田さんの小父さんが「コサギの雛鳥が巣から落ち、飛べないで可愛そうだから飼ってやってくれ」と持ってきました。餌はスジ肉の切り落としくずを届けるというので、とりあえずリンゴ箱を縦に立て中に止まり木を付け、中に入れて飼うことにしました。

そのうち羽ばたくようになり、我が家の小さな池の淵の石が定位置のようにたたずむようになりました。夜はリンゴ箱の巣の中にじっとしていました。野良犬に狙われないように畳表の古を被せていましたが、軒先に止まり木を作って止まらせスジ肉を与えると、以後、夕方になると止まり木で餌を待つようになりました。この鳥は生餌を取るために鋭い眼が両眼、前を向いて光って強面だがおとなしい鳥でした。シロと名付け餌で呼び寄せているうちに、呼ぶだけで池の淵から飛んできました。元気になり庭中を飛び回るようになり、近所へも範囲を広げたのが悪く、ある日、帰ってきませんでした。仲間のコロニーに戻ったかと思っていましたが、人を怖がらないのが災いして友人の弟の空気銃の的となったことが耳に入ってきました。

《ヒバリ》

小鳥は皆同じで繁殖期が近づくまでは囀らずに数羽～10数羽で群れています。ところがヒバリは群れを作らず自分の縄張りを徘徊しています。3～4月頃、オスは単独で空高く舞い上がり上空で静止（ホバリング）をしながら「チュルリ、ピチュリ、チュリ、チュリリ……」としばらく繰り返して鳴き続け「チュリリ、チュリリ、ピー」で終り、地上の巣からかなりはなれた場所にほぼ垂直に舞い降り、そこから警戒しながら地を歩いて巣に戻ります。巣は大体、毎年同じ場所にオスが作るようでした。なぜなのか分かりませんが、遊歩道路の南の海岸の草原には巣作りはしなかったようです。現松が岡二丁目、戦後、長谷川一夫がその一角に別荘を構えた広い草原に2ヵ所、直ぐ近くの上鰯の小田急線の鵜沼南岸駅用地の草原に2ヵ所、現マクドナルドがある三輪さんの草原に3ヵ所が定位置でした。あとは辻堂東海岸の通信学校（現湘洋中学）周辺でした。

新たな巣を探すことは、オスが舞い降りた草原をひたすら歩き回り、ヒバリがいきなり飛びたった近辺を丹念に探すことです。メスは水平に低空を飛んでいましたが、オスと同じに巣の近くには降りませんでした。

巣を見つけたら、二、三日置きに見回り産卵を確認し二週間ほど間を置いて、

孵化の確認をします。雛は10～14日で巣立ちします。当時堀川・辻堂元町には背高の鳥籠にヒバリを入れての「ひばりの鳴かせ会」があり、大きな農家の縁側で飼育され良い声で囀るヒバリがいました。ここに巣立ち寸前の雛(雌雄はわかりませんが)を持っていくと、「ありがとさんよ」と言って、小遣いを呉れました。

《ウグイス》

この鳥は秋になると海岸近くの家にある笹や竹やぶに低い「チュツ、チュツ」と言う鳴き声でやってきました。幹や枝に止まり、せわしく尾を振っては渡って虫をとっています。

ウグイスを昔、秋から5月まで飼ったことがあります。それはある秋の日に本村の兄さんからウグイスがいるが欲しいかと言われ、喜んで飼い方を習い飼うことにしました。翌春、3月頃にキョン、キョンという鳴き声に変わったら、しばらくして「ホーホケキョ・ホーホケキョ」の澄んだ鳴き声で鳴きだしました。そして、「ホーホケキョ」のあとに「ケキョ・ケキョ・ケキョ」とつづくようになった5月に、呉れた兄さんから鳥を放せと言われたのです。仕方なく籠の口を開けましたが、籠には餌を入れ入り口を開けておけとのことで、そのようにしておくと、鳥はしばらく出入りをしていましたが、その後、いなくなりました。

再び、秋に「チュツ、チュツ」とやってきた時に、同じ軒先に籠を吊るし、餌と水をいれ入り口を開けておくと、出入りをはじめたのです。そして、入り口を閉めても驚くことも無く餌を啄ばみました。これが2年続きましたが、そのあとは籠に入る鳥はいませんでした。こうしたことが、この鳥との絆でした。

こういうことが農家で昔からの自然との付き合い方だったのだ、と思いました(最初の捕獲方法は分かりませんでした)。

《メジロ》

今は秋から春先にかけて10羽ほどが水平にせわしく木々を飛び回り、昆虫、木の実を探し花に嘴を入れ、蜜を吸っています。秋口は甲高く「チイー・チュルチュル・チッチッ」と互いに鳴きあいコミュニケーションを取りながら飛び交っています。

昔、この鳥は鵜沼海岸にはあまり来ませんでした。龍口寺裏山の友人から誘いが来ると、藤沢のむさし屋小鳥店に行き鳥もちを買い、夕方、サツマイモを蒸かし、割り箸とシロ縄、鳥もちを持って山に行きます。いつもの止まり木に鳥もちを塗った割り箸と芋を刺した割り箸をシロ縄でくくりつけました。翌朝、現場に行くと、鳥もちに足を獲られたメジロがいるので、静かに布の袋をかぶせ、もち

塗りの割り箸と枝からはずします。羽に鳥もちが付かないようにして鳥の足からもち塗りの割り箸をはずし、周りを半紙で包んだ鳥籠に入れました。これは逃げ出そうと籠目から顔を出そうとして目を突くのを防ぐためです。家に持ち帰り二三日餌付けをし師匠に落とし籠を借り捕獲した場所で鳥の籠の上に落とし籠を重ねて枝に吊るしておく、甲高く「チューイン・チューイン」と鳴きだします。

すると仲間が「チュリ・チュリ」と鳴きあい、籠に寄って来て落とし籠に入り留まると蓋が返り、仲間は落とし籠に閉じ込められ捕獲となります。獲った鳥は下の籠に移し、また落とし籠をセットして待ち、暫らく捕獲を続けました。

そして、1、2羽を家で飼い、後は師匠とむさし屋に持って行きました。「野鳥を飼うのは、繁殖期直前迄で後は放してやりなさい」と師匠に言われました。

我が家で営巣した鳥たち

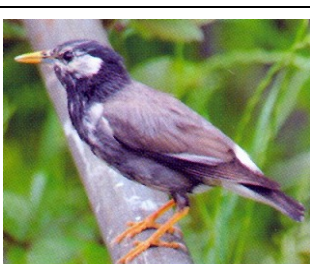
◇ハクセキレイ この鳥は結構ずうずうしく、どこでも巣作りをします。庭の端の伏せた古いプランターの下にメスが産卵、卵を抱いて温め、孵化と子育て中はオスが見張りをします。縄張り意識が強くそばを通ると追い駆けるし、ミラーに写る自分の姿を縄張りに侵入した相手と間違え飛び掛り、ミラーを糞まみれにしてしまいます。

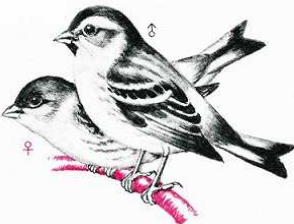
◇オナガ 2年ほど6月に松の天辺に巣作りをしましたが、毎回3羽孵化し1羽は巣から落とされ、その都度親は番で大騒ぎし、何もしない人や犬に急降下で威嚇してきます。結局、野良猫に襲われて餌食となりました。

◇スズメ 秋の米の収穫期に北部に移動する以外は、家の周りに何時も居ます。古屋の屋根のあわせの隙間からもぐりこみ巣作りをしているようで、4月頃にバナナの茎の皮を採って運び、5月中には騒がしい子スズメが親を追い始めます。

◇シジュウカラ かつては子供たちに巣箱作りを教え、松林に備えたので毎年巣作りが見られました。番で「チュンチュンカラカラ・チューピーチューピー」と餌を運んでいたが、ある年、物置の主の青大将(大型のヘビ)・野良猫・ハクビシンのいずれかに襲われてからは、家のまわりを飛び交っていたが巣箱には戻りませんでした。屋根のあわせの隙間から屋根裏に転居した様で後年、天井裏で巣作りあとのバナナの幹の筋皮が見つかりました。

◇ヒヨドリ かつては群れて渡ってきたのにいつの間にか留鳥になりました。何処で巣作りしているか分かりませんが、最適な建材のバナナの幹の皮を他の鳥達と取り合い、せっせと運んで行きました。

たち 我が家で ったり、巣作りしたり、所で察した たちを 図から紹介します	 コサギ	 ヒバリ
ヒバリの巣 	 ウグイス	 メジロ
 メジロを捕る落とし籠	 ハクセキレイ	 オナガ
 シジュウカラ	 巣箱	 ヒヨドリ
 ムクドリ	 ホオジロ	 カワラヒワ

 ウズラ	 カルガモ	 コジュケイ
 コチドリ	 ユリカモメ	 ハシボソミズナギドリ
 マヒワ	 ヨタカ	 アオバズク
 ツグミ	 ジョウビタキ	 ツバメ
 モズ	 ビンズイ	 アオジ

◇ドバト ムクドリ 我が家の建材で巣作りをしていました。ドバト、ムクドリとも番いで来ては、嘴いっぱい材料を挟み運んで行きました。

◇カラス 一番厄介な巣作りです。高い松の頂上から二番目の股に造るのが好きなようでした。3月を過ぎるとピニールコーティングした針金ハンガーの盗難が始まります。洗濯物干しのハンガーから洗濯物を上手くはずして持ち去って行くのです。こうなるとどこかで巣作りが始まっています。そして抱卵中は静かですが、孵化すると雛を守るため注意しないと背後から攻撃をうけます。

以前、月夜にハクビシンに襲われるのを見たことがあります。親鳥はギャアギャアと泣き騒ぐが敵は悠々と雛を咥えて木から下りていくのが、シルエットで見えました、その後、残った雛が餌をねだって騒ぎ出しました。このカラスの巣作りを防ぐには、巣作り時期の行動をチェックして放水で撃退するにかぎります。

その他の野鳥の巣作り

廣田弘毅邸と南側の小田急線との間に開発時に植えられた松林一帯は、かつてホオジロとカワラヒワが巣作りしたところでした。

◇ホオジロ オスは木の天辺で「チョッピイ、チチュ、チュチュチチュー」「一筆啓上仕候 (いっぴつ けいじょう つかまつり そうろう)」とさえずるようです。

メスは二三段下の枝の付け根に巣を作り、4～6月に4、5個の卵を産みます。余談ですが、このいい声で鳴くホオジロを飼ってみたいくて、捕獲、雛の飼育に挑戦しましたが、失敗。然らばとカッコウの托卵を思い出し、家禽の十姉妹(ジュウシマツ)に卵を抱かせることにして、友人からホオジロの産卵日に近い時期に産卵したジュウシマツの番を巣ごと借り、この巣籠にホオジロの卵を3個盗ってきて一緒に托卵させました。そして12日目に托卵は成功して3羽とも孵化しましたが自然の掟は厳しく、ジュウシマツとホオジロの巣の形状が違い、ジュウシマツは間口が横向き、ホオジロは上向きで、これが雛の餌を待つ口の開け方、親からの口移しの給餌に違いが出来、ホオジロの子は3羽とも衰弱死となり失敗に終わりました。

◇カワラヒワ オスは「キュキュキュ、キリリリリ、キリリリリ、ビー」と囀ります。メスは高めの枝に巣作りをし、4～6月に4、5個の卵を産みました。このカワラヒワはヒマワリの種に目がなく、ヒマワリが実ると集団でやってきて種子を食べます。この時期ヒマワリ畑を囲んで霞網を仕掛けて、機を見て追い払うと一斉に飛び立ち霞網に掛かり捕獲され、スズメと共に焼鳥屋で売られていました。このヒワを獲っていた小父さんに1羽分けてもらいました。この鳥はヒマワリの種を与えていれば、

時々囀り、あっけらかんとしているのでベランダを改造したテラスの窓を閉めて籠の入口を開けてみたが、出入りをするが逃げ出そうと窓ガラスにぶつかることもなく、あちこちわたり飛びをするのでした。そんなある日見えなくなり、外に出たものと思い、数日窓を開け籠にヒマワリの種を餌箱に入れていたが戻りませんでした。しかし、これは間違いで後日、一番上の戸棚から乾燥した死骸が出てきたのでした。

◇ウズラ　まだ人の少なかった頃、金杉邸の前の藪でウズラが産卵、孵化したらしく、親を先頭に6、7羽の雛が一行に並び、路を隔てた益田邸に裏門から引っ越すのを見ました。現在は採卵・食料用に改良された品種が広く養殖されていますが反面、野生の鳥を見かけることはなくなりました。

◇カルガモ　益田邸の池では毎年、カルガモがこれも親を先頭に一行に並んで泳いでいました。鵜沼の南部の屋敷には大きな池があちこちにありましたが、私がカルガモを見かけた池は、益田邸、吉村邸(高橋医院)、片瀬川に水路が繋がっていた各務邸、小田柿邸でした。現在は引地川、長久保公園、蓮池で見られます。この鳥の巣作りは知りませんが産卵、抱卵、孵化後の子育てもメスの親鳥がしていました。

◇コジュケイ　7、8月に「チョットコイ、チョットコイ」と大騒ぎで、三輪邸の松林の茂みで鳴くのはコジュケイで、毎年7、8個の卵を産み瓜ぼうの縞の雛が孵化します。可愛いので飼ってみたが餌付けは難しく、二度失敗してしまいました。

◇コチドリ　春先、海岸の砂防林の中の砂原にコチドリが卵を温めています。砂地の窪みに直に産卵するので卵は、色と斑点で目立ちません。巣や雛に危険が迫ると親鳥は擬傷(片羽を開いて地面を這い回る等)と言う行動をとりますが、かえって悪童には巣を見つけられる破目となりました。しかし、これらの鳥は餌の問題があり飼育の対象にはなりませんでした。

渡り鳥・旅鳥・冬鳥

渡り鳥・旅鳥・冬鳥とこの地を訪れる鳥たちは多いので、ここでは珍しいものだけを紹介します。

◇ユリカモメ　秋になるとユリカモメが引地川から片瀬川にかけての海岸で、集団で越冬します。海岸は秋から冬にかけて西風が強烈に吹きます。沖合いで餌をとっていますが、羽を休めるときは、風の弱い日には河口の東岸に出来た砂州にひしめいています。風の強さによりますが、大方、作橋・大平橋の上の電線・周辺の柵に止まっています。風が強まったときとねぐらとするとき、上流の堆

積砂州にひしめいて留まっています。そして早朝、一斉に低空で海に飛んで行きます。昔は片瀬川の西方橋上流の大きな砂州が逗留場所でした。この鳥は北の繁殖地で産卵・子育てをするので、年明け早めに北に帰ります。

◇ハシボソミズナギドリ　春から夏の間の一日、なぜか大量の海鳥の死体が漂着しました。たまたま西から東へ大群で通過していく黒っぽい茶色の海鳥を目撃しました。一部が海面に降り立っていましたが、それでも海面が黒く見えるほどでした。これがハシボソミズナギドリで繁殖地は南半球だそうです。

◇マヒワ　かつて渚橋の南に木の込んだ松林がありました。ここは渡り途中の定宿で12月の初めの2日ほど羽を休めます。この時は動きが鈍いので、鳥刺しといって竹の真っ直ぐな釣竿の先に鳥もちを塗り、鳥に向け真っ直ぐに繰り出します。疲れている鳥は驚かず鳥もちにつけて捕えました。これはゲームで飼ったり食べるためのものでは無いので、何羽獲ったかを自慢し直ぐに放しました。

◇ヨタカ　5月頃に三輪邸の松林にやって来て常留しています。名のとおり夜行性で、夕方から松林の中を滑空するように飛んでいます。昼間は枝の根に張り付いて寝ていますが、保護色でなかなか見つかりません。この鳥は、夕方、海岸の溜り(引地川の切り替えで出来て半月湖)の上に大きな蚊柱が発生し、ここにギンヤンマ(トンボ)やコウモリが群がって来るので、これを狙って飛び廻っていました。そして海岸の松林の草原に居るヒメネズミを捕っていたようです。

◇アオバズク　初夏にやって来たこの鳥も夕方の海岸の蚊柱でヤンマを捕っていました、昼間、松の林の枝にうずくまっているところをスズメに見つかり集団でチュンチュンと騒ぎたてられ、時には追われてガラス窓に激突して失神することがありました。

◇ツグミ　昔は、秋口に集団でシベリヤからやって来ましたが、今は留鳥が多いようです。市街では単独で芝生の上にやって来てツンツンと跳ねて前進して、お辞儀をしてあたりを見回す動作を繰り返し、虫などの餌を探しています。そして飛び立つときに必ずゲーゲーと鳴きます。

小学生の頃、百日咳に掛かり座敷で寝かされていた時に、縁側の向こうの芝生に始終やってくるので捕まえようと思いました。父の釣道具を持ち出し、そっと外に抜け出し裏の下水の土管の淵でミズを捕り、これを餌に仕掛けると簡単に針に掛かりました。だがこの鳥が飛び廻り大騒ぎとなり、手元から道糸を切り逃がしましたが、大目玉を食らうことになりました。

◇ジョウビタキ　単独で来て家のそばの青木、南天などの木を縄張りとして尾

を上下にせわしく振っています。他の鳥が来ると追い駆けるほど気性が激しいので、家の中の鏡に自分の姿が写ると飛び込んできます。鳥籠の奥にカガミを置いて入口に仕掛けしておいたら中に入ったが、この鳥も大暴れしたので結局は逃がすことになりました。

◇ツバメ　昔は別荘の洋間のテラスの軒の壁に巣受けのための小さな板切れを取り付けておくと良く巣を架けましたが、今は商店の軒で見かけるだけになりました。ツバメは体の割に卵を多く生むので雛が育ってくると、良く巣から落ちます。親が大騒ぎするので近くに板を取り付けて止まらせてやると、巣の中の雛とは別にこの雛に餌を運んでくるのが見られました。

◇モズ　秋から冬にかけ市街に一番早く来る鳥で、キイーキイーキョンキョンキョンと大声で鳴き、やって来ました。この鳥は頭の天辺の毛が円く赤茶で眼の淵が真っ黒で、サングラスを架けたヤンキーの風貌でアマガエル・トカゲやカナヘビ・バツタ・カマキリをとっていました。この鳥はまた、他の鳥を追いかけていました。

◇ビンズイ　地べたをひたすら静かに5、6羽の群れで這い回るのはビンズイで、落ち葉の下の虫を啄ばんでいました。人が近づくと地に張り付く緑褐色のつまらない鳥でした。

◇アオジ　秋になると何時も番で来て同じ低い茂みと地べたを徘徊して、チッチッ、チッチッと鳴いていますが、春に鳴き方がチョピーチョ、チクイチチリと変わると山に帰ってゆきました。

◇コウモリ　鳥類ではないが、夏の終りから秋にかけてみられます。鵠沼の空地では夕方になると沢山の虫が舞い上がり、これを狙ってコウモリがピューピューと素早い動きでやってきます。2、3匹のときは良いが7、8匹となるとぶつからないかとハラハラします。かつて、夕刻に海岸の溜まりの上で、ギンヤンマの餌取り群れにコウモリも紛れるので、捕獲を試みましたが成功しませんでした。

以上、鵠沼で出合った動物たちとの付き合い、触れ合いについて話してきましたが、すっかり子どもの時の作文になってしまいました。

(ないとう　よしつぐ)

作家春秋 ①

森岡 澄 会員

宇 千代 今東光

『 』

大正半ば宇 千代が本 の「燕楽 」という洋 屋でウエイトレスをしていたとき、一歳年下の今東光と恋人の仲になった。東光は毎晩、店の け時になるとで千代を待っていた。当時の東光はフサフサとした漆 の の 少年であった。

ある晩一 に歩いていたとき、千代がふとプ端の八百屋の店に寄り「この 二束下さいナ…」と った。 しかった千代は恋人と歩いている時でも、明日の朝の味噌汁のことを えないわけにはいかなかった。

しかしそれを っていた東光はゲンナリして、このことをその 出入りしていた川 之介に した。それがもとになって 川の『 』という短く が生れた。

それから半世紀以上が経ち、千代が の 病 に入 したとき、手 後の回復のために毎日廊下を歩いていると、今東光という名札のかかった病室の前に出た。

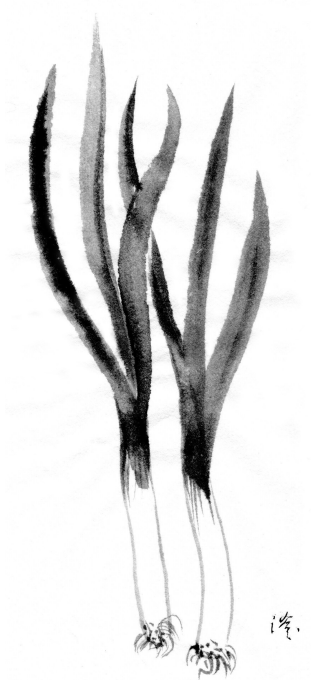
久しぶりにあう東光はすこぶる元気で、千代に向かって昔ながらの毒 ぶりで、ちょうど弟の今日出海も いに来ていて がはずんだ。 い日の恋人同士が 年になり同じ病 に入 し を合わせた。ただそれだけのことだった。

千代は廊下を歩くたびに東光の名札をたしかめた。ある日その名札が えなくなっていた。たずねると東光は築地の癌研に移ったという。東光が 字結 癌で亡くなったのは、昭和 52 年 月であった。79 歳。

千代はそれから平成 年、1986 年、99 歳まで生きぬいた。

沼を る会の仲 と 文学村を歩いたとき、此処が宇 千代終焉の家だと教わった。

ゆるやかな坂ブに した二 家でコーナーの窓に絵の伊万 か、 島の尺皿がみえた。



今井 夫のこと

「小 を書くことは きません」

明治生命の 役で作家の水上 太 は、母校慶応の熱烈な 球ファンだった。春秋のリーグ戦では、神宮球場のネット の指定席を っては いた。慶応 普 時代に彼は 球 に所属し、二塁のポジションを守って名手と云われた。

昭和初め文壇でも 球熱が昂じ、水上をキャプテンにした三田文学チームと 彦が監督をつとめる クラブというのが、世田 の明治生命グラウンドに乗り こんで対戦したことがあった。 チームが揃いのユニホームなのに、三田チームは水上におんぶして全員明治生命のユニホームを着こんで、スパイクまで借用した。水上は 分の持場の二塁を守ったから 信ありげな守備ぶりだった。打撃も大いに奮いホームランと二塁打を ばした。その日は十九対八で三田チームが大勝した。三田チームのピッチャーは「三田文学の新人」今井 夫で、彼は 年新 人グループの 球団でも投手だった。その時の捕手は、サトウハチローだった。



浪

のちに今井が水上に招かれ将棋を指した時、水上が笑いながら「今井君は 球もうまいし将棋もつよい。不思議な人だネ…。ただどうも きっぱいんじゃないか 」と皮 な を告げた。今井は何やら感じるころがあった。そこで「小 を書くことは きません」と抗弁すると、今度は水上がそんなことで ったんじゃない と意外な をした。

水上が本社 堂で 演中に心 発作で倒れたのは、昭和 15 年 月のこと。その前年の秋の六大学リーグ戦で慶応が七年ぶりに優勝を果たし水上はこれを大いに喜んだ。亡くなる半年前、主だった 球 係 を 宅に招き、晩 の席で激励をしたばかりだった。

もりおか きよし

カット 筆



須賀(すか)と高砂 (たかすな)

渡部 瞭

「砂丘」という語は、明治以降ヨーロッパの近代科学が導入された段階で、地形学の“dune”または“sand dune”の訳語として日本で作り出された漢語で、中国語では「流沙」または「沙丘」が相当する。この「沙」は「砂」と同義語である。だから、江戸時代以前の文には「砂丘」の語は出てこないと聞く。

では、やまとことばでは古来何といったかというと、「すか」もしくは「たかすな」だったらしい。「すか」は、通常「須賀」という音読みの漢字が充てられるため、漢語と思われがちだが、やまとことばである。

神奈川県内には、かつて海軍鎮守府が置かれた軍都「横須賀」があり、平塚には「須賀」漁港が見られる。また、茅ヶ崎には「浜須賀」があり、市立浜須賀小学校、浜須賀中学校が置かれている。

なお、同じ「須賀」の文字を充てて「すが」と読む場合がある。神社や苗字に多く見られ、神社の場合、「菅」や「須我」「清」「酒賀」「素鷲」「蘇我(曾我・曾賀)」を充てることもある。日本全国に分布するが、島根県、高知県に特に多いという。牛頭天王(ごずてんのう)・須佐之男命(すさのおのみこと)を祭神とする祇園信仰の神社のことで、砂丘とは関係がない。

ところで、かつて鶺鴒にも「横須賀」という小字名があった。現在の鶺鴒神明一丁目、日本精工から湘南高校にかけての一带である。この辺りは「奈須野ヶ原」と呼ばれたこともあるらしい。これは1184(寿永 3)年、那須与一・宗高が屋島にて扇的の射たる弓一張と残の矢を神明宮に奉納、併せて、領地那須野百石を寄進したと伝えられることに因むと思われる。このために神明宮例大祭の一番山車(宮ノ前)の人形は那須与一だとされる。いずれこれらの事情はこの千一話で詳述する予定である。

次に「たかすな」である。これは当然「高砂」の字を充てるが、これには「たかさご」の読みもあり、能の演目にもなっていて、むしろこちらの方が有名である。「砂」のやまとことばには「すな」の他に「まさご」あるいは「まなご」があって、こちらの方が一般的だった。辻堂東海岸で生まれたといわれる名曲「浜辺の歌」で、作詞者の林 古溪は、二番の歌詞に「はまべのまさご、まなごいまは」と両者を並記している。

「たかさご」は「まさご」から来ているのだろう。「高砂の尾上の松」という文学的表現は、「海岸砂丘の稜線上のクロマツ」という味も素っ気もない表現もできる。

ところで、湘南地方の高砂は「たかすな」と読むのが一般的で、「たかさご」の例を知らない。

茅ヶ崎には「高砂緑地」があり、辻堂西海岸には「市立高砂小学校」がある。

現在の江ノ電石上駅は、1920年から1940年まで「高砂停留所」といい、石上停留所は開業時(1902年)以来別にイトーヨーカドー脇の坂を登った辺りにあった。両停留所とも1940年2月末日で戦時廃止となり、1950年7月15日に高砂停留所が石上駅の名で復活したのである。現在はここから東方に「高砂公園」も開設されているが、付近にこれらの地名の元となった顕著な砂丘は見られない。1921年測図の1:25,000地形図では、現在のカトリック藤沢教会辺りから南方に延びる砂丘列が見られる。あるいはこれかも知れないと睨んでいる。



村岡に住んでいた評論家・婦人問題研究家の山川菊榮が 1943 年に著した『我が住む村』に次の件がある。

「三月は桃の節句で、田畑のへりから絹のように軟かな蓬の新芽を摘み、香りの高い草餅を供へてお雛様を祭り、女子供はつゝましやかなお花見に行きました。何事も型通り、仕来り通りのその時代には、お花見の季節といへば、判で押したように毎年キチンとお花見に出かけたものです。これは女子供の遊びの日で、所は桃の名所、鵜沼の高砂あたりが多かつたようです。今は高砂通りも家ばかりで、東京の住宅街のような詰らぬ所になつてしまひ、海が見える所ではありませんが、もとはその名の通り、強い南風で吹きよせられた高い砂の山でした。その高い砂山の桃林の中から、遙かに蒼い海原を見渡しながら、お辨當を開き、濱へおりては鰯の地引網や、用意して行つた鎌で貝を掘り出したりして、一日のんびりと遊んだものです。」

ここに出てくる高砂は、現在の鵜沼藤が谷四丁目と鵜沼桜が岡二丁目の境界付近にあった海拔 18m 程度の砂丘を指すと思われる。大正時代には文字通りの砂山で、大東の関根佐一郎さんは、小学生の頃わざわざここまで来て砂滑りをして遊んだ思い出を語っておられた。

それが震災後村岡から花見に訪れるようなモモ畑になり、昭和初期には山口寅之助(高瀬彌一の叔父)によって「松島苑住宅地」が開発されることになる。

山川菊榮の文に出てくる「高砂通り」とは、「山口通り」ともいう上岡バス停から江ノ電鵜沼駅方向に向かう道路で、「松島苑住宅地」開発によって整備され、この書が発行された頃には邦枝完二(作家)、林達夫(評論家)、南部圭之介(映画評論家)邸が軒を連ね、「東京の住宅街のような詰らぬ所」になってしまっていた。

(わたなべ りょう)

＜故渡部瞭会員『鵜沼を巡る千一話』第 0003 話より＞

「鵜沼を語る会」活動の記録

(平成29年12月～30年5月)

平成29年12月例会

12月12日(火) 10時～12時 第1談話室 18名出席

司会進行 綿谷会員

- 会誌『鵜沼』115号配布(印刷:12月6日 製本:12月11日)
- 新年会参加申込み受付。会場の都合で第3水曜日の1月17日とする。
- 会誌『鵜沼』バックナンバーを有効利用する案を検討
『お話』—「藤沢駅南口周辺の移り変わり」(会誌115号掲載分をテキスト)
について佐藤和子会員が話した。

12月運営委員会

12月26日(火) 10時～12時 第1談話室 4名出席

平成30年1月例会・新年会 「たか亭」鵜沼海岸6丁目 18名出席

1月17日(水) 11時30分～12時 例会

(会場の都合で第3水曜日) 12時～14時 新年会

恒例のビンゴゲームを今年も楽しんだ。

1月運営委員会

1月30日(火) 10時～12時 第1談話室 5名出席

2月例会

2月17日(火) 10時～12時 第1談話室 17名出席

司会進行 守谷会員

- 新年会報告。余剰金は本会計に繰り入れる。
- 賀詞交歓会での『岸田劉生来鵜100年—絵日記から分かる鵜沼での生活』展示が好評であった、との報告があった。
- 会誌バックナンバー残部の扱いについて話し合った。
『お話』—「鵜沼海岸での釣りは別荘の池での魚とりから始まった」((会誌115号掲載分をテキスト)について内藤会員が話した。映像使用

2月運営委員会

2月27日(火) 10時～12時 第1談話室 6名出席

3月例会

3月13日(火) 10時～12時 第1談話室 17名出席

司会進行 佐藤弘会員

— サークル交歓会報告

— 会誌『鵜沼』116号の原稿進捗状況。原稿〆切は4月末日。6月発行予定

— 会誌のカラーページの発注先検討。印刷あるいはカラーコピーの優位性を探り、早めに決定する。

『お話』—浮世絵に見る『江の島三重塔』（会誌116号に掲載予定）について岡田会員が話した。映像使用

3月運営委員会

3月27日(火) 10時～12時 第1談話室 5名出席

4月例会

4月10日(火) 10時～12時 第1談話室 16名出席

司会進行 竹内会員

— 年次総会に向けての準備について話した。

— 会誌『鵜沼』116号の原稿は、会員7名から寄せられている。

カラーページのコピーは藤沢市市民活動推進センターで用紙を持ち込み、当会会員が行なう。コピー代：¥30/枚（B5サイズ）

— 4月1日より鵜沼郷土資料展示室で、鵜沼郷土資料展示室運営委員会、鵜沼を語る会、藤沢市郷土歴史課の三者主催で『むかしの鵜沼村の信仰と庶民の暮らし』を開催。資料として鵜沼郷土資料展示室だより第40号が配付された。この展示に併せて公開講座— ① 映像で辿る むかしの鵜沼村庶民の暮らし（5月26日 鵜沼市民センター大ホールで開催） ② 歴史講座『江戸時代鵜沼村の弘法大師信仰』講師：圭室文雄氏（当会会員）（6月23日 鵜沼市民センター大ホールで開催） ③ 鵜沼地区にある9箇所の弘法大師堂の紹介・巡礼（7月14日 要申し込み）の開催が企画されている。

『お話』—芥川龍之介の中国旅行と『手帳』（会誌115号に掲載分をテキスト）について神谷会員が話した。映像使用

4月運営委員会

4月24日(火) 10時～12時 第1談話室 6名出席

第32回総会

5月8日（火） 10時～10時40分 学習室①

22名出席

司会進行 中島会員

挨拶：有田裕一 会長

峯浩太郎 鵜沼公民館長/鵜沼市民センター長（本年4月1日着任）

総会議長選出 有田会長（会則に従い議長は会長とする）

総会議案の審議を行ない、5議案すべて全会一致で承認された。

* 平成29年度事業報告 * 収支決算報告/監査報告 * 平成30年度の事業計画

* 収支予算 * 会則改定 第7条（役員）1の項 顧問を削除

<平成30年度事業計画>

- 会誌『鵜沼』第116号（6月）、117号（12月）発行
- 鵜沼地区公民館まつりでの展示参加（テーマ未定）
- 会誌『鵜沼』バックナンバーのデータ完備
- 蓄積された資料の整備、見直しを通し、有効利用を図る。
- 今後、相応のテーマが提案され、内容並びに経費が妥当とされた場合、本年度の活動に繰り込む。

提案：公民館まつりのテーマ候補として、浮世絵に見る『江の島・三重塔』を挙げたらどうか（候補のひとつとする）
入会金を設けたら如何か？（参考意見にとどめる）

5月例会（引き続き10時40分より事務局から報告）

- 刀根恵子新会員紹介（4月10日入会）
- 宮澤彰会員逝去（4月17日）について
- 会誌116号の掲載内容について報告。6月末発行予定、66ページ
- 今年のクゲヌマランについて報告。例年に比べ開花が早い。
- 年会費の徴収

『お話』 11時過ぎに鵜沼資料展示室に移り、内藤会員の説明で『むかしの鵜沼村の信仰と庶民の暮らし—相模国準四国八十八ヶ所札所（霊場）の検証』の展示を見学。12時10分終了

5月運営委員会

5月29日（火） 10時～12時 第1談話室

7名出席

<5月現在会員数 43名>

く 後

- 今年の春の到来はいきなりだった。月中旬、宅でったのカラスアゲハが、昨年よりも一ヶ月早くび立った。桜は一気に咲き、あつというに散り毎年、五月休ごろに最盛期をえるクゲヌマランも、休前に早々と白いをつけていた。その可憐な姿が実にいい。▽会『沼』は年回発するが前号から発時期をずらした。年事の事をタイムリーに掲しようとの狙いだが、く・レイアウト作業が忙しい時期とぶつかり、中的にしなければならなくなった。会は原稿入力、印刷、本と一切合切、会員による手作りなので、少しでも多くの会員の力が求められている。(弥)
- 江の島三塔が浮世絵に描かれているのを初めて知った時は奮した。しかも北斎の『相州江の島』の画中にである。このほかにも三塔が描かれた作があることを今回紹介した。私の更なる心事は、幕末から明治初期の絵ハガキに「三塔が写っている写真はないか」である。皆さんも探してください。▽今井夫未発原稿の活字化が終わり料を整理していたら、新▽などに発したものの切り抜きが数点つかった。そのなかに沼にわりのあるものが二、三あり、これを《穂ひろい》として掲することにした。T.O
- このたび巻敏氏についてべた結果、多くの成果が得られた。それは、氏が周囲からしく思われていなかったことから来る料の欠乏である。つまり氏について書き残したいと思う内が、妹の左登子さんをいては、ほぼいなかった点である。また、書いたら拙いと判断したであろう外の人が多くいたことも事実だろう。しかし、氏が保管しけた原稿が、現代の川研究に対し献した事実は疑う余地がない。氏の反や他の客的ななどは次稿にぐが、依然、氏にする、特に晩年の料が少ないため、情報の収に引きき努めたい。今後ともご教授のほどよろしくおいいいたします。(Y.K)
- 前号から発時期を変更したが、116号も予定り出せそう。今号もみ応えのある内容のものが多く寄せられた。なかでも、内会員の「わたしの沼の思い出」くは、私も同じ時期、同じ環境の沼で幼少年時代をしている。ので、大きな屋敷のあった沼海岸地区の懐かしい生活や情景を思い出させてくれる。それにしても内会員の憶力にはかされる。思わず「先、ヤッタネ」と云ってしまった。*Coffee Break*などのページもあるので、皆さんがべたこと、思ったこと、気づいたことなど気楽に書いてみませんか。(有)

『鵜沼』 第 116 号
平成 30 年 6 月 10 日発行

本誌の記事引用の際は
ご連絡ください

編集・発行 鵜沼を語る会
藤沢市鵜沼海岸 2-10-34
鵜沼公民館内
電話 0466-33-2002

URL <http://kugenuma.sakura.ne.jp/>